延岡市文化財調査報告書　第47集

市内遺跡

平成23年度市内遺跡発掘調査事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

延岡市教育委員会

序　文

本書は延岡市教育委員会が国・県補助を受け実施した、市内遺跡発掘調査事業の調査報告書です。

延岡市は宮崎県の北部に位置し、近代以降は豊富な水資源を利用した県内最大の電気化学工業集積地として栄え、教育文化・産業経済の牽引役を担っています。永年の課題であった高速道路網整備の進展が図られる中、国土形成計画九州圏広域地方計画において、九州地方の基幹都市圏の一つである延岡・日向都市圏の中心的都市として、また、定住自立圏構想においても、中心市として位置づけられるなど、東九州の基幹都市としての役割がさらに高まっています。このような中、「第５次延岡市長期総合計画」に基づき、企業誘致や地場産業の振興など雇用状況の改善に向けた取り組みや、新清掃工場の整備、新火葬場や新最終処分場の建設着手など様々な施策を進めています。また、近年の合併に伴い海・山・川という地域資源が加わり、観光振興も活発化しつつあります。各地に伝わる豊富な伝承芸能や農林水産資源を活かした、新たな活気ある「まちづくり」が始まったところです。一方で、県内における家畜伝染病の発生に伴う経済の停滞や、東日本大震災の被害状況等を踏まえた今後の災害への対応等、新たな課題も生じています。

本年度における本市の埋蔵文化財保護行政は、景気の動向を反映し民間開発は大小問わずに、引続き減少傾向にありました。前述のように公共事業においては大規模事業が進捗中であり、これらに伴う埋蔵文化財の発掘調査については昨年度までに、ほぼ終了しています。本年度の試掘確認調査は６件であり、合併後の北浦町で、延岡市教育委員会として初めての調査を行っています。

本書が文化財保護への理解を深める一助として、広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり宮崎県教育委員会をはじめ、地権者並びに開発事業関係者、調査地近隣の方々に御協力をいただきましたことに、深く感謝いたします。

平成24年３月

延岡市教育委員会
教育長　町　田　訓　久

例　　言

1．本書は各種開発事業に伴い、延岡市教育委員会が国・県補助を受け、平成23年度に実施した市内遺跡発掘調査報告書である。

2．本年度は、６箇所の試掘・確認調査を実施した。

3. 昨年度調査を実施した、延岡城跡（第26次）は本書に掲載した。

4. 年度末に調査予定の南浦村古墳は次年度に報告する。

5．発掘現場での実測写真撮影等の記録は、発掘作業員の補助を得て、尾方農一、甲斐康大が行った。

6．整理作業は延岡市教育委員会で行った。本書に使用している遺構の製図、図面作成、出土遺物の撮影・実測・製図・図面作成は、整理作業員の協力を得て、各現場の担当者が行った。

7．本書における方位は磁北を示し、レベルはすべて海抜高である。

8．本書の執筆は各担当者が行い、編集は尾方が行った。

9．出土遺物及び調査記録類は、延岡市教育委員会で保管し、今後、展示公開する予定である。

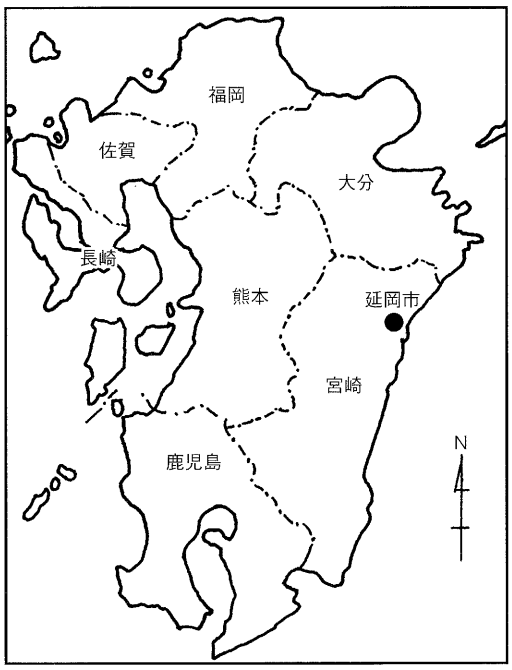


Fig.01　延岡市位置図

本　文　目　次

第１章　はじめに

１．はじめに……1

２．調査の組織……1

第２章　調査の記録

１．延岡城跡（第26次）……7

２．延岡城内遺跡（第22次）……13

３．古川町鴨田地点　……14

４．岩土北平遺跡（第３次）……15

５．延岡城内遺跡（第23次）……27

６．北浦町淵ノ元地点　……28

７．延岡市古墳第13号墳　……29

報告書抄録　……35

挿　図　目　次

Fig.01　延岡市位置図

Fig.02　延岡市全図（1/250,000）……3

Fig.03　平成23年度市内遺跡発掘調査地分布図1　市街地（1/50,000）……4

Fig.04　平成23年度市内遺跡発掘調査地分布図2　北方町（1/25,000）……5

Fig.05　平成23年度市内遺跡発掘調査地分布図3　北浦町（1/10,000）……6

Fig.06　延岡城跡（第26次）位置図（1/15,000）……7

Fig.07　延岡城跡（第26次）調査区配置図（1/2,500）……7

Fig.08　延岡城跡（第26次）箱式石棺実測図（1/30）……8

Fig.09　延岡城跡（第26次）出土遺物実測図（1/2）……10

Fig.10　延岡城内遺跡（第22次）位置図（1/15,000）……13

Fig.11　延岡城内遺跡（第22次）調査区配置図（1/2,500）……13

Fig.12　古川町鴨田地点位置図（1/15,000）……14

Fig.13　古川町鴨田地点調査区配置図（1/2,500）……14

Fig.14　岩土北平遺跡（第3次）位置図（1/15,000）……15

Fig.15　岩土北平遺跡（第3次）調査区配置図（1/4,000）……15

Fig.16　岩土北平遺跡（第3次）調査区及び遺構配置図（1/40）……17

Fig.17　岩土北平遺跡（第3次）出土石棺実測図（1/20）……18

Fig.18　岩土北平遺跡（第3次）出土遺物実測図1（2/3）……21

Fig.19　岩土北平遺跡（第3次）出土遺物実測図2（1/1）……22

Fig.20　岩土北平遺跡（第3次）出土遺物実測図3（1/2）……23

Fig.21　延岡城内遺跡（第23次）位置図（1/15,000）……27

Fig.22　延岡城内遺跡（第23次）調査区配置図（1/2,500）……27

Fig.23　北浦町淵ノ元地点位置図（1/15,000）……28

Fig.24　北浦町淵ノ元地点調査区配置図（1/2,500）……28

Fig.25　延岡市古墳第13号墳位置図（1/15,000）……29

Fig.26　延岡市古墳第13号墳調査区配置図（1/2,500）……29

Fig.27　延岡市古墳第13号墳墳丘測量図（1/200）……30

Fig.28　延岡市古墳第13号墳土層断面図（1/60）……31

Fig.29　延岡市古墳第13号墳出土遺物実測図（1/2）……33

表　目　次

第１表　平成23年度市内遺跡発掘調査地一覧表……２
第２表　延岡城跡（第26次）出土遺物観察表……10
第３表　岩土北平遺跡出土石器観察表……22
第４表　岩土北平遺跡出土土器観察表……23
第５表　延岡市古墳第13号墳出土遺物観察表……32

写　真　目　次

PL.01　延岡城跡（第26次）近景（南西から）……７
PL.02　延岡城跡（第26次）出土石棺検出状況（西から）……11
PL.03　延岡城跡（第26次）出土石棺棺身検出状況（西から）……11
PL.04　延岡城跡（第26次）出土石棺（北から）……11
PL.05　延岡城跡（第26次）出土石棺（東から）……12
PL.06　延岡城跡（第26次）出土石棺床石状況（東から）……12
PL.07　延岡城跡（第26次）出土遺物……12
PL.08　延岡城内遺跡（第22次）近景（北西から）……13
PL.09　古川町鴨田地点近景（北東から）……14
PL.10　岩土北平遺跡（第3次）近景（南東から）……15
PL.11　岩土北平遺跡（第3次）空中写真（北西から）……24
PL.12　岩土北平遺跡（第3次）石棺調査前（南から）……24
PL.13　岩土北平遺跡（第3次）石棺蓋石除去状況（南から）……24
PL.14　岩土北平遺跡（第3次）石棺棺身検出状況（南から）……24
PL.15　岩土北平遺跡（第3次）石棺調査状況（南から）……24
PL.16　岩土北平遺跡（第3次）石棺完掘状況（南から）……25
PL.17　岩土北平遺跡（第3次）石棺完掘状況（東から）……25
PL.18　岩土北平遺跡（第3次）石棺完掘状況（北から）……25
PL.19　岩土北平遺跡（第3次）石棺完掘状況（西から）……25
PL.20　岩土北平遺跡（第3次）石棺掘りかた状況（南から）……25
PL.21　岩土北平遺跡（第3次）石棺掘りかた状況（西から）……25
PL.22　岩土北平遺跡（第3次）遺構検出状況……26
PL.23　岩土北平遺跡（第3次）石棺撤去後（南から）……26
PL.24　岩土北平遺跡（第3次）完掘状況（南から）……26
PL.25　岩土北平遺跡（第3次）出土遺物……26
PL.26　岩土北平遺跡（第3次）出土遺物……26
PL.27　延岡城内遺跡（第23次）近景（南から）……27
PL.28　北浦町淵ノ元地点近景（南西から）……28
PL.29　廣田荒神社……29
PL.30　延岡市古墳第13号墳近景（南東から）……34
PL.31　延岡市古墳第13号墳近景（南から）……34
PL.32　延岡市古墳第13号墳調査状況……34
PL.33　延岡市古墳第13号墳土層断面……34
PL.34　延岡市古墳第13号墳出土遺物……34

第１章　はじめに

１．はじめに

延岡市は宮崎県の北部に位置し、九州山地や大崩・祖母・傾山系に源を発し日向灘に注ぐ五ヶ瀬川・北川・祝子川の下流域にあたる。これらの河川によって形成された沖積平野に市街地や住宅地、工業地帯が広がり、宮崎県北部の中心都市となっている。豊かな自然環境を利用し、古くから農林水産業が盛んである。また、豊富な水資源を利用した電気化学工業を中心とする県内有数の工業集積地でもある。中心市街地には近世延岡藩主の居城であった延岡城跡があり、「千人殺し」と呼ばれる高石垣を中心とした石垣群が残り、現代の都市景観と歴史的景観が融合する街並みが形成されている。

本年度における本市の埋蔵文化財保護行政は、景気の動向を反映し民間開発は大小問わずに、引き続き減少傾向にあった。一方、公共事業においては、天下町で「クレアパーク延岡」工業団地の造成、古川町・岡富町で区画整理事業、北方町では新最終処分場建設等の大規模事業が本格的に進捗中である。これらに伴う埋蔵文化財の発掘調査については、昨年度に終了している。本年度は新最終処分場建設地周辺の市道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査が行われた。

本年度は７箇所（１箇所、年度末実施予定）の地点を、開発事業やその関連事業等と埋蔵文化財保護との調整資料を得るために、試掘・確認調査を実施した。

２．調査の組織

調査主体	延岡市教育委員会	
	教　育　長	町　田　訓　久
	教　育　部　長	甲　斐　享　博
	文　化　課　長	佐　藤　憲　史
	文化課長補佐兼文化振興係長	鵜　島　孝　幸
	文化課文化財係長	山　田　　聡
庶務担当	文化振興係主任主事	松　岡　直　子
調査担当	文化財係専門員	小　野　信　彦
	文化財係主任主事	尾　方　農　一
	文化財係主事	甲　斐　康　大
調査指導	宮崎県教育委員会文化財課	
	宮崎県埋蔵文化財センター	

発掘作業員

安藤登美子　甲斐カツキ　甲斐さよみ　甲斐ひとみ　甲斐正子　甲斐如高　工藤洋子
白石良子　中島千賀　林田裕子　柳田伴子　柳田八千代　矢野勇　山内伸夫

整理作業員

小野亜紀子　甲斐美智代　佐藤繭子　那須由起子

なお、調査にあたって地権者の方をはじめ、地区住民の方々、開発部局・関係機関及び開発事業者等に多くの配慮をいただいた。

番号	遺　跡　名	所　在　地	調査原因	調査面積	開始日	終了日
1	延岡城内遺跡（第22次）	桜小路339－5	その他の建物	30.5㎡	20110523	20110527
2	古川町鴨田地点	古川町82－1外	その他の建物	33.4㎡	20110601	20110606
3	岩土北平遺跡（第3次）	北方町笠下寅729	農業関連	16.2㎡	20110615	20110720
4	延岡城内遺跡（第23次）	天神小路310－2	個人住宅建設	6.0㎡	20110720	20110722
5	北浦町淵ノ元地点	北浦町古江1943－1・2 北浦町古江1944－2・3	市立図書館 北浦分館建設	60.0㎡	20110823	20110825
6	延岡市古墳第13号墳	柚の木田町1320外	防災工事	7.1㎡	20110826	20110912
7	南浦村古墳	熊野江町2328番地	範囲確認調査	調査予定	20120305 （予定）	20120330 （予定）

第１表　平成23年度市内遺跡発掘調査地一覧

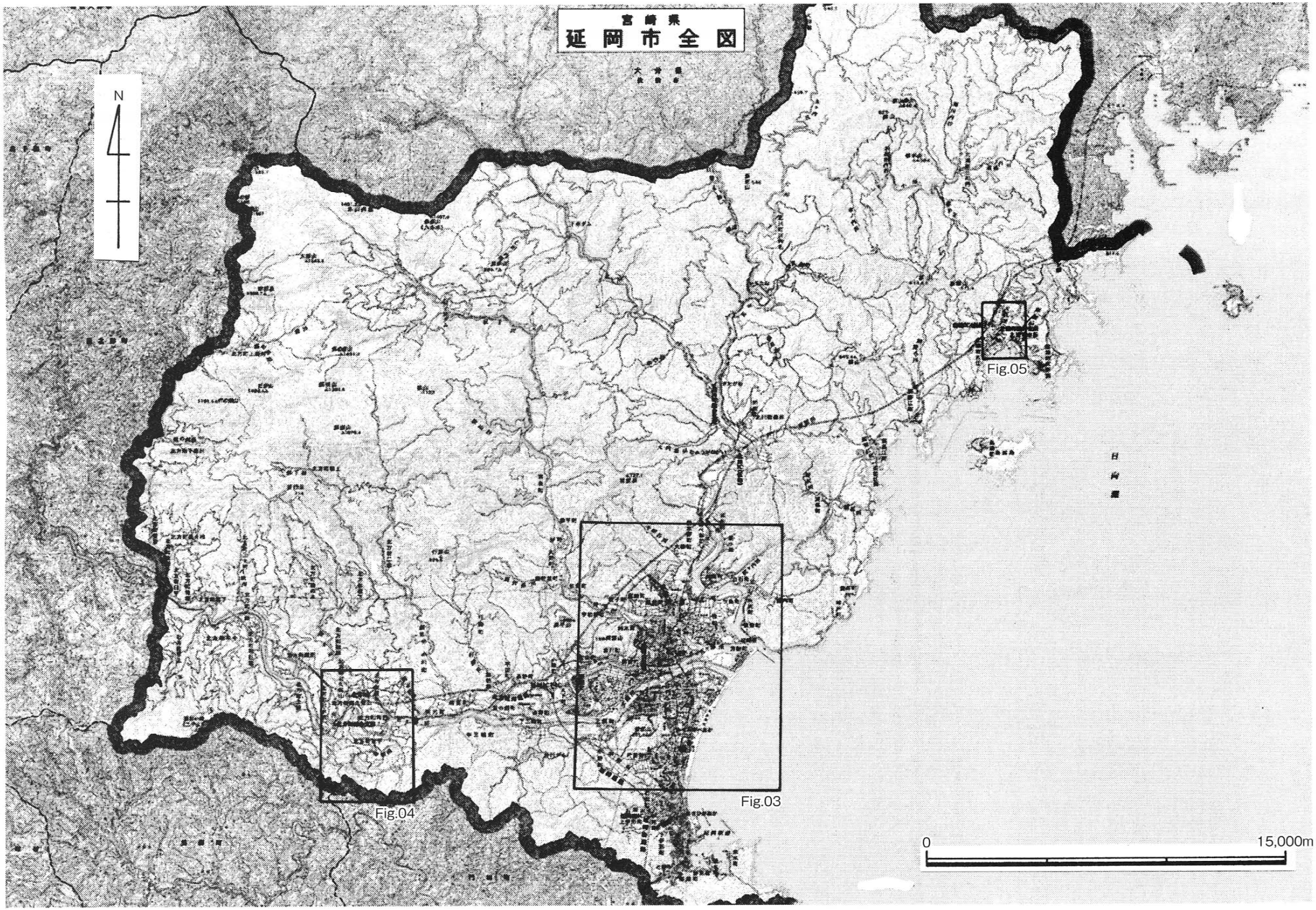
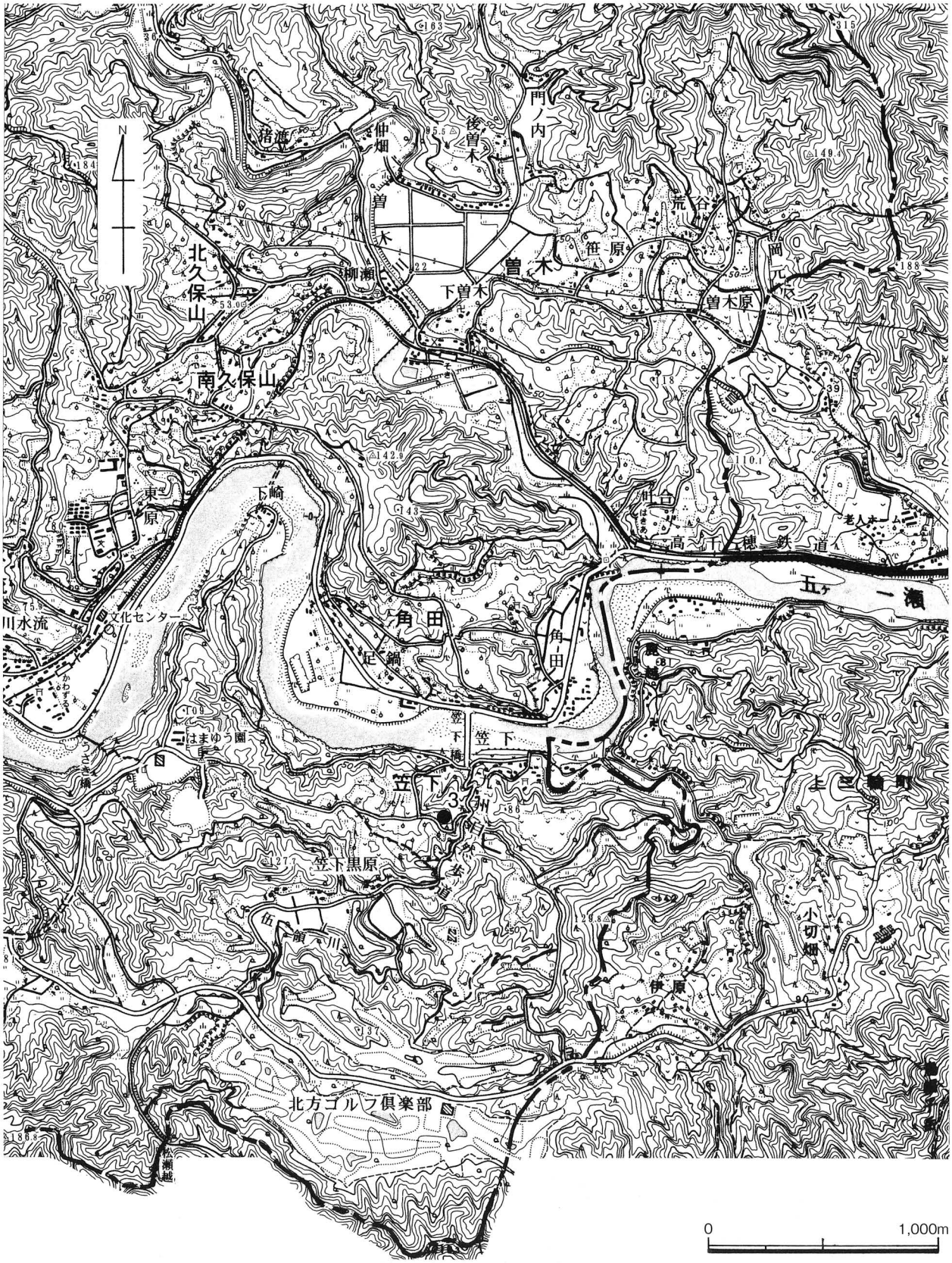


Fig.03（P.4）　Fig.04（P.5）　Fig.05（P.6）

Fig.02　延岡市全図（1/250,000）

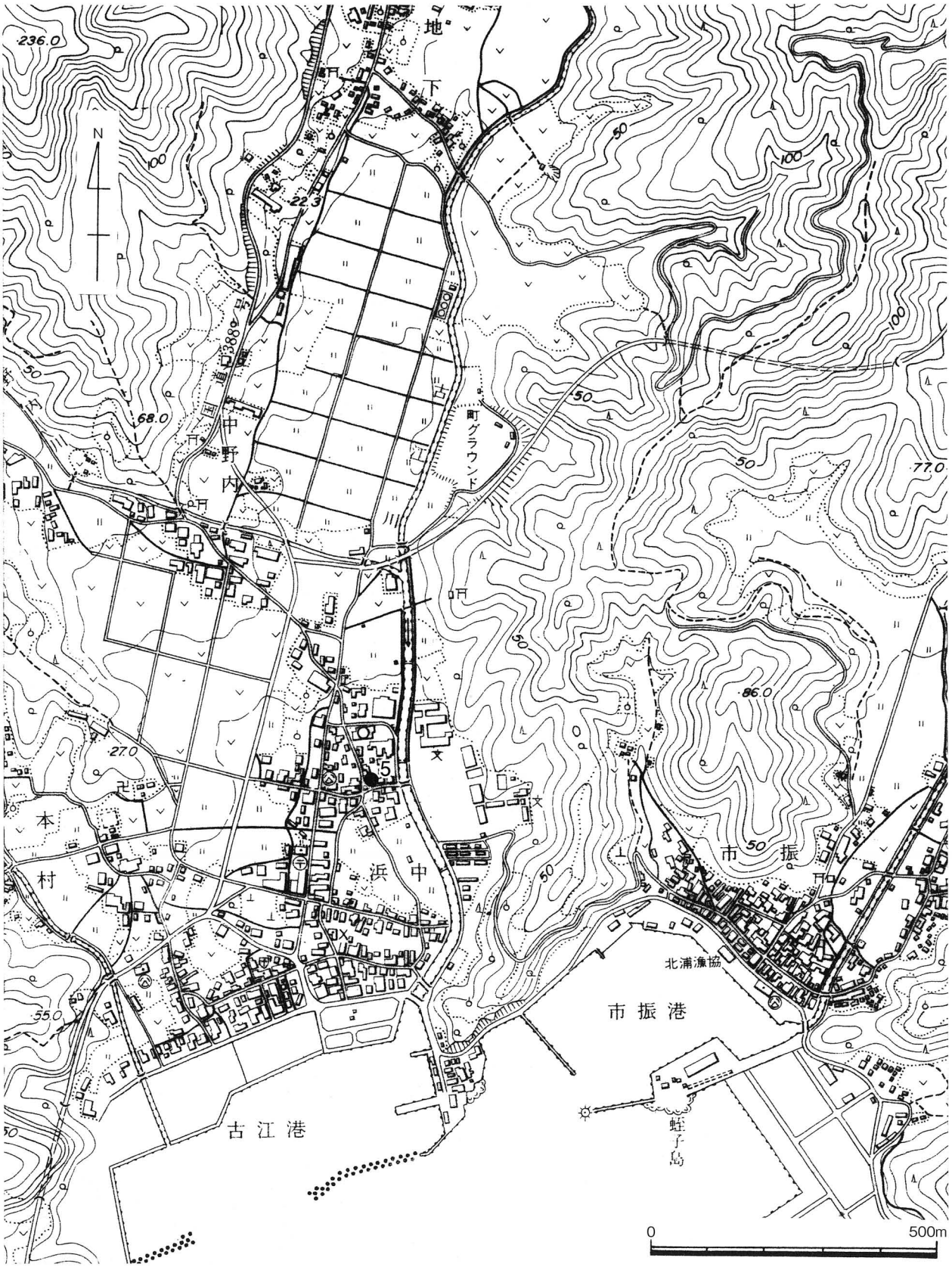
1．延岡城内遺跡（第22次）　2．古川町鴨田地点
4．延岡城内遺跡（第23次）　6．延岡市古墳第13号墳

Fig.03　平成23年度市内遺跡発掘調査地分布図１　市街地（1/50,000）



3．岩土北平遺跡（第３次）

Fig.04　平成23年度市内遺跡発掘調査地分布図２　北方町（1／25,000）



5．北浦町淵ノ元地点

Fig.05　平成23年度市内遺跡発掘調査地分布図３　北浦町（1/10,000）

第２章　調査の記録

１．延岡城跡（第26次）

所 在 地	延岡市東本小路94－3	調査面積	131.3㎡
調査原因	範囲確認	担 当 者	尾方
調査期間	20110301～20110310	処　　置	保存

（１）位置と環境

延岡城（縣城）は1601～1603年にかけて高橋元種によって築城された宮崎県内有数の近世城郭である。関ヶ原の戦いに参加した元種は、鉄砲の普及による戦法の変化を目の当たりにし、石垣や水堀を主体とする城郭の必要性を認識し、新たな城郭の整備に着手した。築城にあたっては天然の要害を利用している。本市の中心部を流れる五ヶ瀬川、大瀬川を外堀として活用し、その中州に所在する標高53.4mの独立丘陵に本城を築いている。同時に城下町の整備も着手された。現在の市街地の町割りは、延岡七町と呼ばれる城下町が原型となっている。その城下町は、元種の着手から50余年かけて完成することとなる。その後、延岡城は1871年の廃城令によって、その昨日を失うまで日本最南端の譜代大名、延岡藩主の居城であった。

今回の調査地は、延岡城の北東部に位置する。「明治元年前後延岡藩士族屋敷図（明治大学蔵）」等の絵図資料によると、家臣の屋敷跡が並ぶ。また一部、内堀が描かれている。延岡城及び、その周辺地の調査では近世の遺構・遺物はもちろんであるが、弥生時代後期の遺構・遺物も多く出土している。特に平成５～６（1993～1994）年に行われた延岡城（第５・７次）調査【内堀（第２・３次）】においては、大量の土器等と供に木製農具等が出土している。また、平成５（1993）年の第４次調査【ニノ丸（第１次）】では、土壙墓が１基検出されている。延岡城の麓に横穴が２基あったとも言われており、付近に弥生時代後半～古墳時代初頭にかけての生活痕跡が多く確認されている。

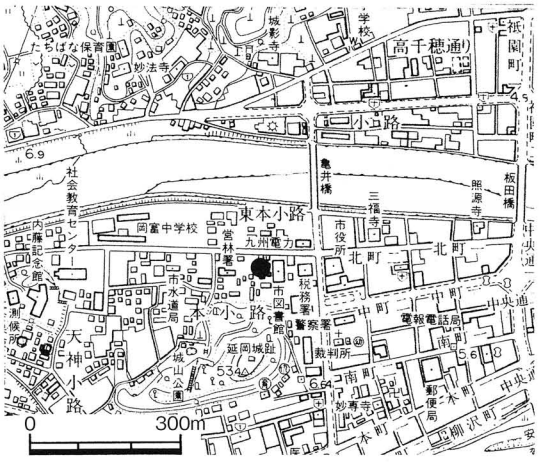


Fig.06　延岡城跡（第26次）位置図（1/15,000）

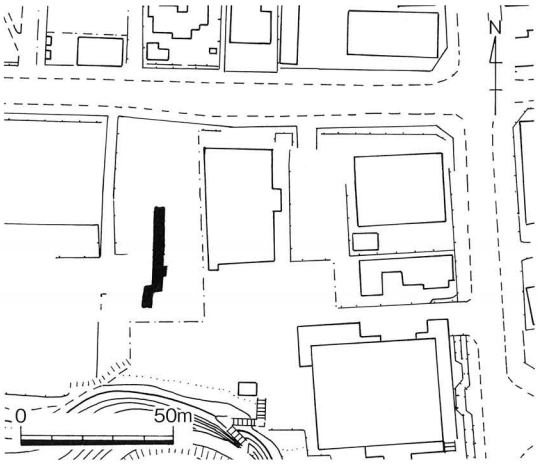
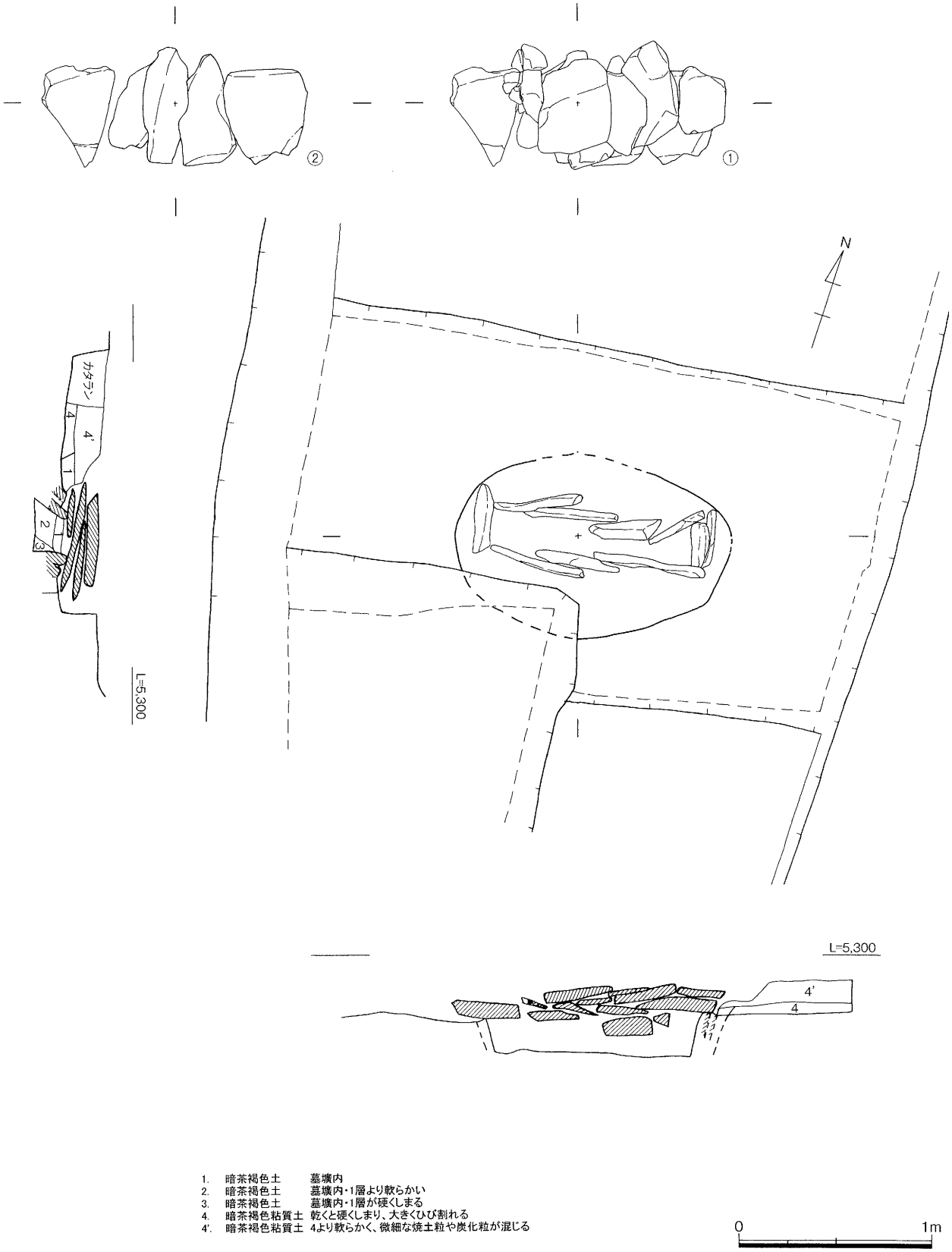


Fig.07　延岡城跡（第26次）調査区配置図（1/2,500）

PL.01　延岡城跡（第26次）近景（南西から）



1. 暗茶褐色土　　墓壙内
2. 暗茶褐色土　　墓壙内・1層より軟らかい
3. 暗茶褐色土　　墓壙内・1層が硬くしまる
4. 暗茶褐色粘質土　乾くと硬くしまり、大きくひび割れる
4'. 暗茶褐色粘質土　4より軟らかく、微細な焼土粒や炭化粒が混じる

0　1m

Fig.08　延岡城跡（第26次）出土石棺実測図（1/30）

（2）調査の概要

延岡城内堀の位置確認に主眼を置き、南北方向にトレンチを設定した。近代以降の撹乱が多く、深い撹乱は現地表面から２ｍを超すものもあった。近代以降の井戸跡と思われる土層も確認している。延岡城の内堀跡については確認できなかった。当初の推定よりも南側に位置すると考えられる。調査区の標準的な土層は、表土下に約70cmの３層にわたる客土層があり、その下に漸移的に約20cmの混土層、５層の暗茶褐色粘質土、６層の暗黄褐色粘質土である。５層の上面で箱式石棺１基を検出した。

（3）検出遺構（P8 Fig.08/P11 PL.02～04/P12 PL.05～06）

箱式石棺１基。確認調査であるため、完掘していない。東西方向に軸をもち、頭位は西であろう。棺身は長軸約126cm・短軸約45cm・深さ約25cmであった。西側一辺に１枚、東側に重なるように２枚、南側に３枚、北側に４枚の計10枚の千枚岩を立てている。床石は小さく割れた千枚岩であった（P12 PL.05/PL.06）。蓋石は重なった状況で検出している（P8 Fig.08①）。重なった石を除くと、最終的には４枚ないし５枚の石で蓋がなされていたとも考えられる（P8 Fig.08②）。遺物は出土していない。

（4）出土遺物（P10 Fig.09/P12 PL.07）

石棺に伴う遺物は出土していない。近世の陶磁器類が出土している。18世紀後半～19世紀にかけてのものが殆どで、肥前系・関西系のものが多かった。ここには、その代表的な遺物を掲載する。

１は染付輪花皿で内外面に施文。高台見込に一重圏線内に銘を有す。高台畳付は釉剥ぎである。２は関西系の端反碗で内外面に細かい貫入が見られる。３は景徳鎮窯系青花の端反碗である。内面見込に二重圏線、外面に草花文を施している。４は肥前系染付丸碗で、いわゆる「くらわんか」と呼ばれるものである。外面に雪輪文を施す。高台見込みに銘を有する。５は須恵器の甕片である。

（5）まとめ

今回の確認調査では、延岡城の内堀跡は検出されなかった。内堀の位置は、調査区より南側、より延岡城に近い位置で検出されることが予想される。また、近世の遺構面に関しては、近代以降の撹乱が大きく、その多くが破壊されている可能性が高い。

今回、検出された箱式石棺は、五ヶ瀬川と大瀬川によって形成された中州、本市で川中地区と呼ばれる地区において初めて検出された千枚岩製の石棺である。本市における石棺の分布には、その石材の相違に大きな特徴が挙げられる。阿蘇溶結凝灰岩製の石棺と千枚岩製の石棺の分布であるが、前者は本市の西～南部にかけて分布し、後者は本市の北側に分布する傾向にある。その分布を隔てる一つの要素は五ヶ瀬川で、右岸以南での千枚岩製の石棺の出土は初めてとなる。近年、五ヶ瀬川左岸で調査が行われた上多々良遺跡で検出された古墳群においては、千枚岩製の石棺が出土しており、隣接する凝灰岩製の石棺を持つ古川古墳との関連性で注目された。本遺跡はさらにその議論を深める一つの材料となる。また、千枚岩製の石棺を持つ古墳の分布に重なるように、延岡城で二ノ丸で検出されたような、両小口に千枚岩立てる土壙墓が分布する。今後の発見例の増加と研究の成果が待たれる。

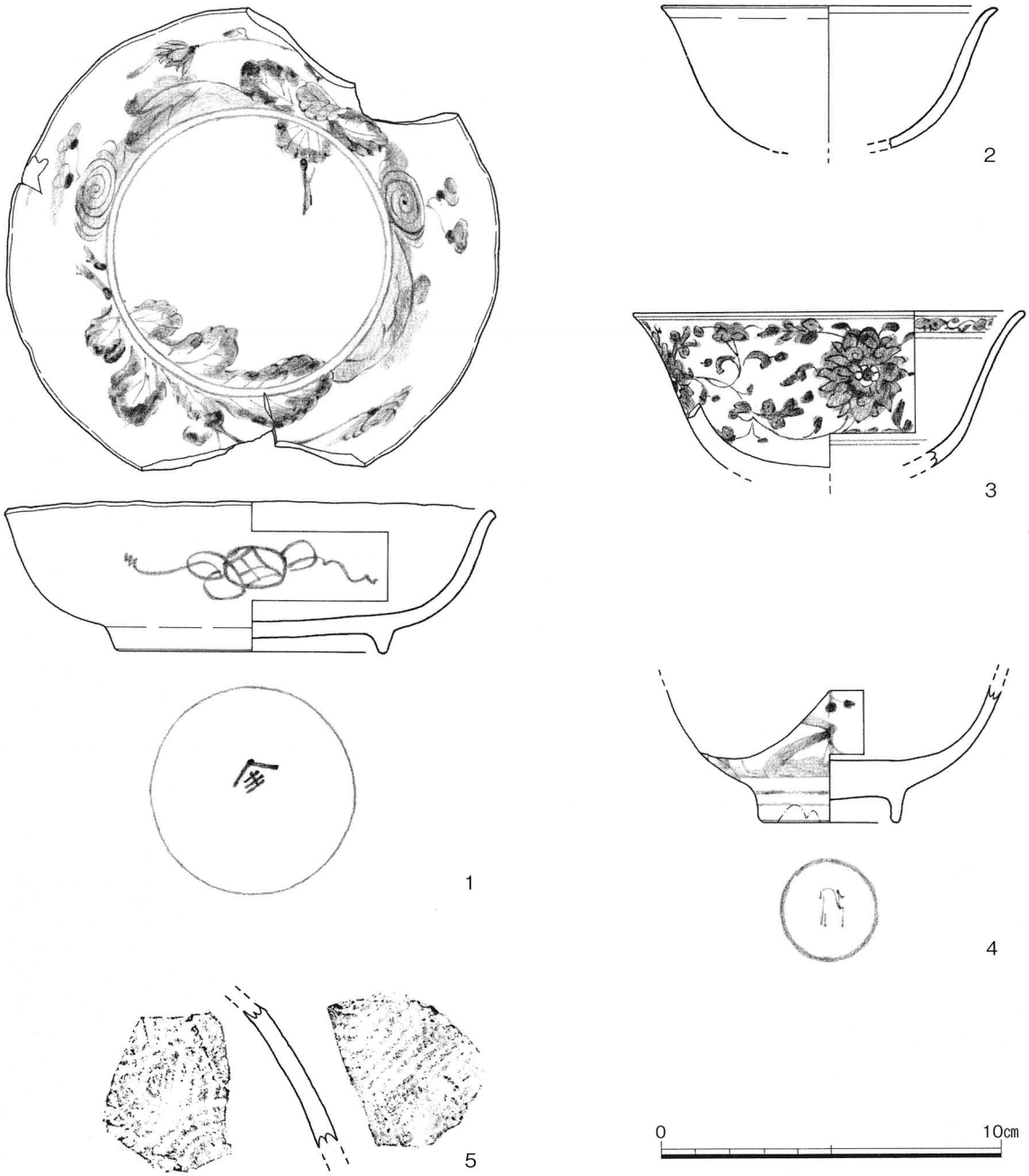
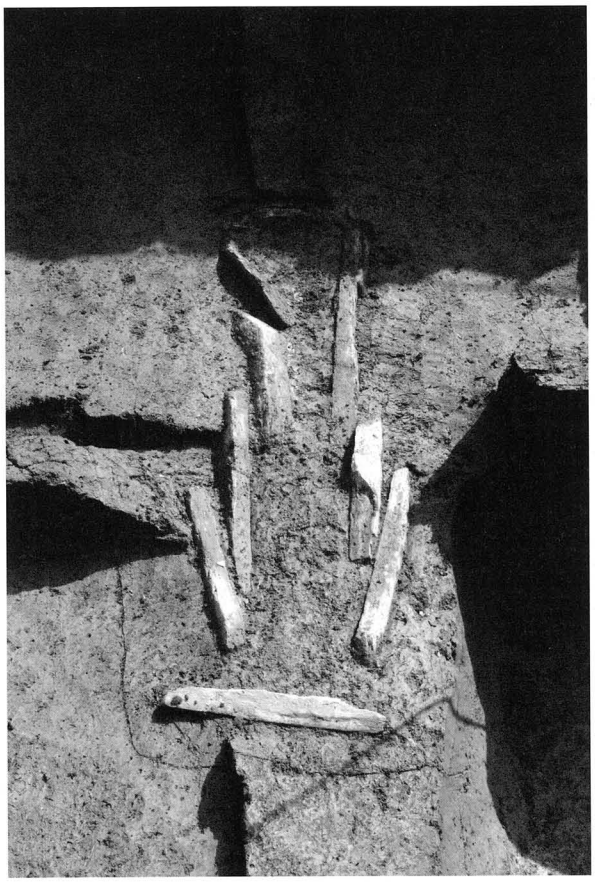


Fig.09　延岡城跡（第26次）出土遺物実測図（1/2）

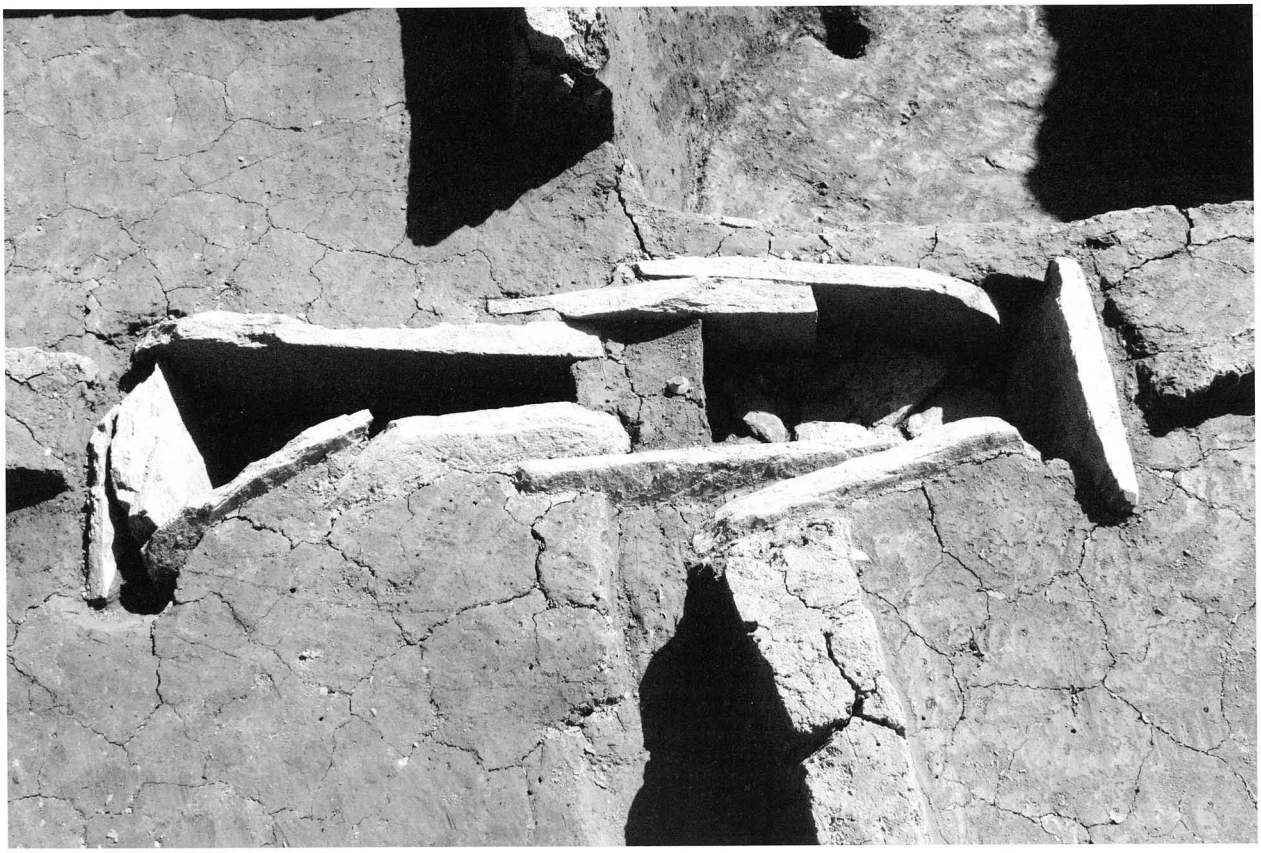
番号	種別	器種	法量（cm）			形態及び文様	備考
			口径・長	底径・幅	器高・厚		
1	磁器	皿	14.2	7.8	4.3	輪花皿	
2	磁器	碗	10.0		5.0	端反り・内外面に細かい貫入	
3	磁器	碗	11.5	－	－	景徳鎮窯系青花端反碗	
4	磁器	碗	－	2.0	－	くらわんか・外面に雪輪文	
5	須恵器	甕	－	－	－	内面：同心円タタキ　外面：平行タタキ	古代か

第２表　延岡城跡（第26次）出土遺物観察表

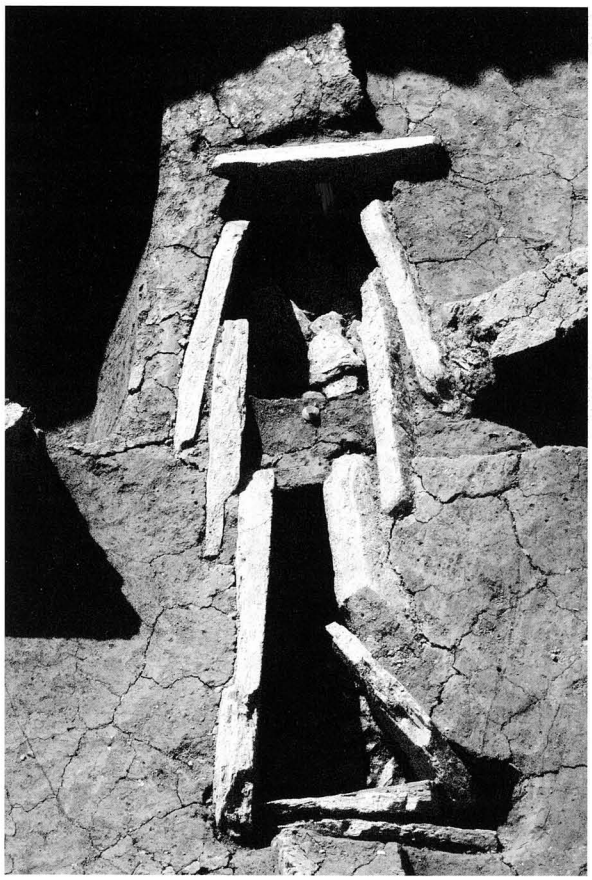
PL.02　延岡城跡（第26次）出土石棺検出状況（西から）



PL.03　延岡城跡（第26次）出土石棺棺身検出状況（西から）

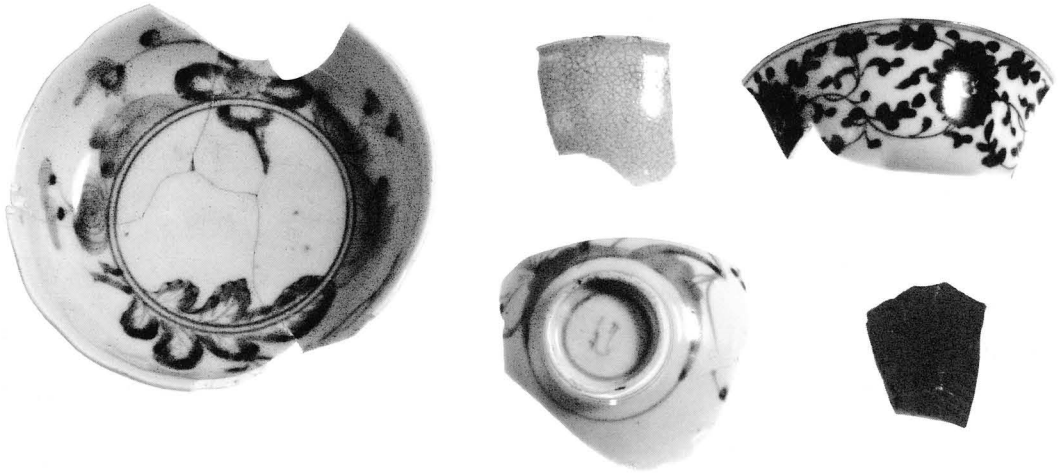


PL.04　延岡城跡（第26次）出土石棺（北から）



PL.05　延岡城跡（第26次）出土石棺（東から）

PL.06　延岡城跡（第26次）出土石棺床石状況（東から）



PL.07　延岡城跡（第26次）出土遺物

2．延岡城内遺跡（第22次）

所 在 地	桜小路339－5	調査面積	30.5㎡
調査原因	その他の建物	担 当 者	尾方
調査期間	20110523～20110527	処　　置	工事実施

（1）位置と環境

延岡城は1601～1603年にかけて高橋元種によって築城された。市内を流れる五ヶ瀬川、大瀬川に挟まれた中州に位置し、標高約54mの独立丘陵という天然の要害に築かれた平山城である。高橋元種は、同時に城下町の整備も着手している。城の東側に北町、中町、南町の３町がつくられ、武家屋敷地として五ヶ瀬川の北側に北小路、城下に本小路、桜小路が整備されている。以降、城下町の整備は17世紀中頃まで続き完成する。現在の延岡市街地の原型は、この時に着手された城下町の町割が活かされている。調査地は、近世において武家屋敷等が整備されていた地域である。現在は市街地化が進み、その面影は残っていない。

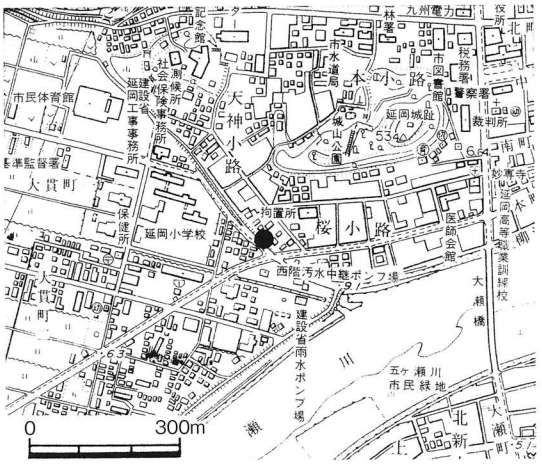


Fig.10　延岡城内遺跡（第22次）位置図（1/15,000）

（2）調査の概要

集合住宅建設に伴い、確認調査を実施した。３箇所のトレンチを設定し調査を行った。現地表から約40～80cmで砂質土と粘質土の互層を為す堆積層を確認した。表土及び造成土内で少量の陶磁器が出土するが、いずれも遺構等に伴うものではなかった。

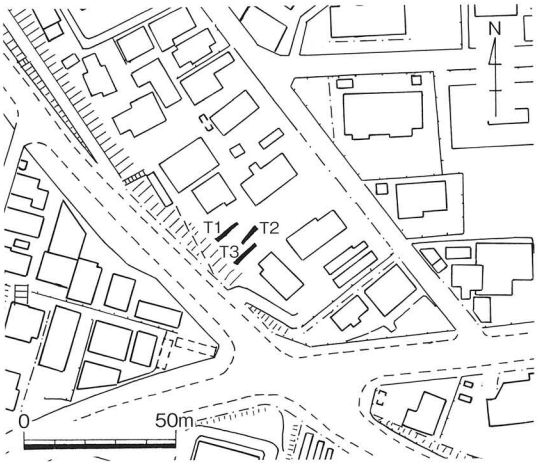


Fig.11　延岡城内遺跡（第22次）調査区配置図（1/2,500）

（3）検出遺構

なし。

（4）出土遺物

陶磁器。

（5）まとめ

今回の調査では、遺構は検出されていないが、引き続き開発には留意が必要な地区である。

PL.08　延岡城内遺跡（第22次）近景（北西から）

3．古川町鴨田地点

所 在 地	古川町82－1外	調査面積	33.4㎡
調査原因	その他の建物	担 当 者	尾方
調査期間	20110601～20110606	処　　置	工事実施

（1）位置と環境

古川町は五ヶ瀬川左岸に広がる。岡富山から派生する丘陵地帯と、五ヶ瀬川の後背湿地帯に営まれている水田地帯が広がる。現在、岡富古川土地区画整理事業が進捗中である。また、それに伴い国道218号線の改良工事、仮称岡富橋の架設事業、延岡西環状線の道路網整備等の大規模公共事業が進められている。調査地周辺は古川古墳、宮崎県指定史跡延岡古墳群第34号墳（指定解除）等が分布し、古くから埋蔵文化財の包蔵地としても知られていた。土地区画整理事業に伴い、平成17（2005）年度～平成21年度の５年にわたって上多々良遺跡の調査が行われた。古墳や古代の火葬墓等の検出、延岡市では初となる埴輪や墨書土器の出土等、大きな成果を残している。

今回の調査地は、五ヶ瀬川が大きく北に蛇行する外側にあたり、現堤防の裏側で小規模な支流である松山川に挟まれた地点である。

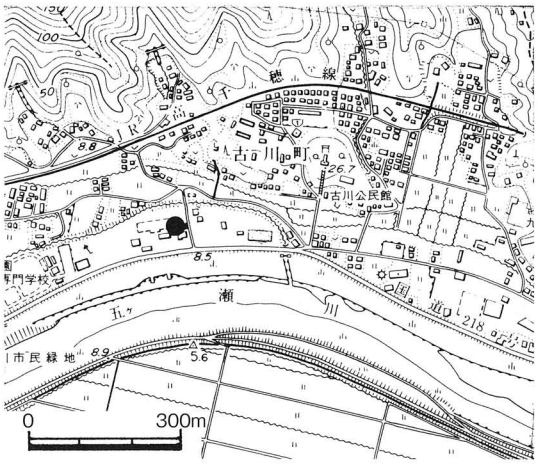


Fig.12　古川町鴨田地点位置図（1/15,000）

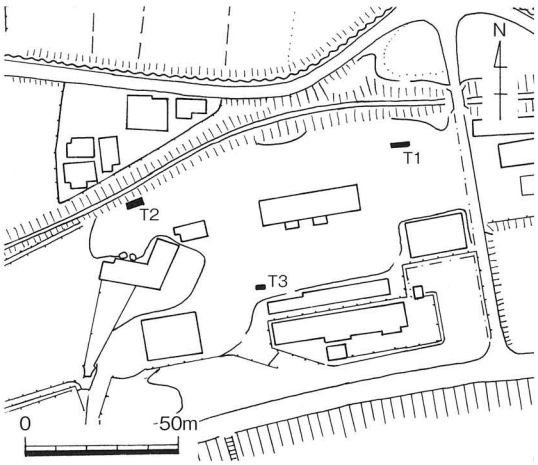


Fig.13　古川町鴨田地点調査区配置図（1/2,500）

（2）調査の概要

３箇所のトレンチを設定した。各トレンチ共に地表下約１～1.8mまで客土であった。その下層は砂礫、粘土等の河川性の堆積層であった。

（3）検出遺構

なし。

（4）出土遺物

なし。

（5）まとめ

遺構・遺物は検出されていない。周辺の遺跡の分布等を考慮すると、付近の開発には今後も留意する必要がある。

PL.09　古川町鴨田地点近景（北東から）

4．岩土北平遺跡（第３次）

所 在 地　延岡市北方町笠下寅729　　調査面積　16.2㎡
調査原因　農業関連（個人農地）　　担 当 者　尾方
調査期間　20110615～20110720　　処　　置　工事実施

（１）位置と環境

岩土北平遺跡の所在する北方町は、本市の西部に位置し、南は東臼杵郡門川町・美郷町、西は西臼杵郡日之影町、北は大分県佐伯市と境を接する。北には1,000m級の大崩山・鬼の目山などの山々が連なり、南には九州山地に源を発する五ヶ瀬川が大きく蛇行しながら流れる。五ヶ瀬川とその支流の曽木川流域に阿蘇溶結凝灰岩の台地や河岸段丘が発達しており、多くの遺跡が所在する。

本遺跡から約5.5km 上流の五ヶ瀬川左岸に所在する矢野原遺跡は、ＡＴ層下位から石核等が出土しているのをはじめ、縄文早期の押型文土器・集石遺構、弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡等が出土している。同時期の竪穴住居跡は、矢野原遺跡の同一丘陵上で南に分布する蔵田遺跡や、２kmほど上流の右岸に広がる打扇遺跡、早日渡遺跡等で検出されている。本遺跡の約３km北の台地の南縁辺には、後曽木遺跡が分布している。６基の箱式石棺が出土している。そのうち２基は古くから露出しており、1962（昭和12）年に北方村古墳の一部として宮崎県より指定されている。北方町内における箱式石棺の出土は、この他に殿上、矢野原、駄小屋等の五ヶ瀬川左岸の地域で発見されている。

岩土北平遺跡は、五ヶ瀬川右岸の標高約70～80mの台地上に位置する。東に流れ下っていた五ヶ瀬川は、台地の上流部で大きく北に向かい、馬蹄状に流れを変え南に向かい、再び東に向かう大きな変化を見せる。流れの外側にあたる台地の北側は急峻な地形をみせる。また台地の南側にも深い解析谷が続いている。五ヶ瀬川は、さらに下流で大きく北に向かい、支流の曽木川

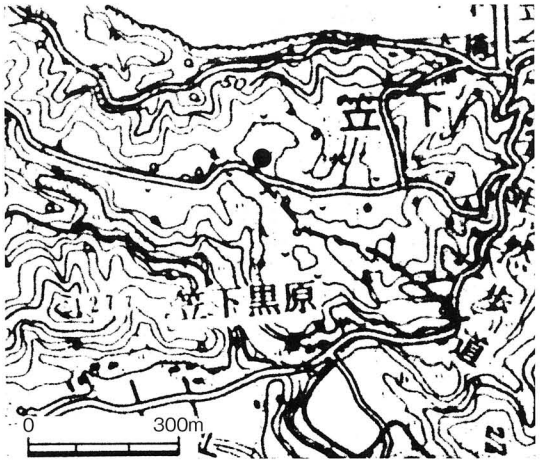


Fig.14　岩土北平遺跡（第３次）位置図（1/15,000）

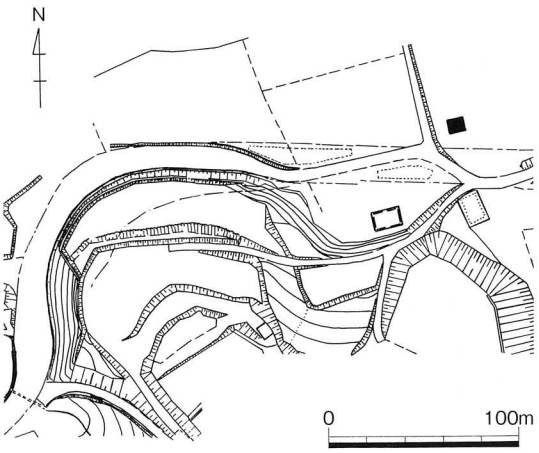
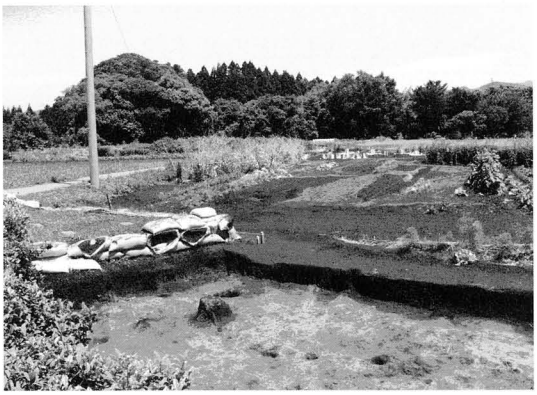


Fig.15　岩土北平遺跡（第３次）調査区配置図（1/4,000）


PL.10　岩土北平遺跡（第３次）近景（南東から）

と合流し、東に流れを変えて下っていく。

古くから遺跡の所在が知られる台地で、本遺跡に南接する岩土原遺跡は、1971（昭和44）年に南九州大学によって発掘調査が行われている。半船底型細石核と、隆帯上に爪形文を施した土器が共伴して出土している。また西には、本市の新最終処分場建設に伴い2010（平成21）年に発掘調査を行った上田下遺跡が所在する。調査において縄文時代早期の集石遺構、古墳時代前期の竪穴住居跡等の多くの遺構・遺物が検出されている。また本年度（平成23年度）は、新最終処分場の建設によって車両の増加が見込まれる同地区の安全性及び車両の効率的な運行を確保するために、かねてより強く望まれていた市道岩土原線の整備が行われた。それに伴い、岩土原遺跡（第２次）・岩土北平遺跡（第２次）の発掘調査も行われている。

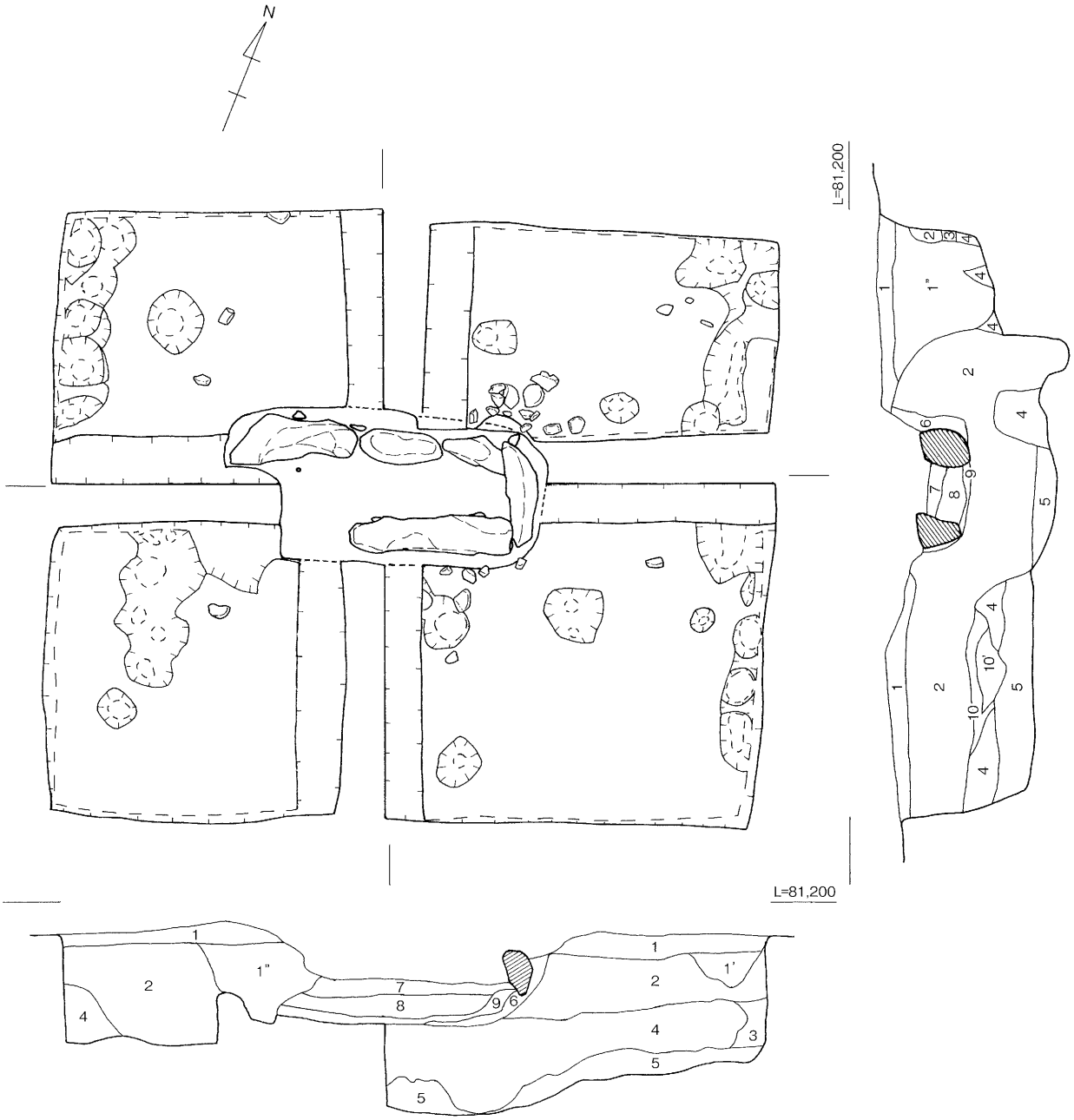
台地の南側にある細くて深い解析谷は、岩土原遺跡の下付近で、大きな谷と合流する。この谷の西方には、縄文時代前期～中期にかけての土器等が出土した笠下下原遺跡等が分布している。笠下下原遺跡の南は再び標高約120～140mのやや急峻な尾根が東西に伸びている。その尾根を越すと、小さな谷の南側に標高約80～90mの丘陵地帯が東西に伸びている。この丘陵は北から南に下る小さな細い谷によって隔てられる、南から北に向かって張り出す数箇所の舌状丘陵を持つ複雑な地形を呈している。この舌状丘陵は、緩やかな斜面地を形成し、急峻な山と狭隘な谷によって形成される地域では、まとまった平坦面を持つ地形となっている。この丘陵地帯は、1988（昭和63）年にゴルフ場建設に伴い調査が行われた笠下（ゴルフ場）遺跡が分布している。ナイフ形石器や剥片尖頭器の旧石器時代の遺物をはじめ、150基を超える縄文早期の集石遺構、弥生終末期～古墳時代にかけての竪穴住居跡13軒、また墨書を有する空風輪（五輪塔）や明銭が出土している。

（２）調査の概要（P17 Fig.16/P24 PL.11/P26 PL.22）

2011（平成23）年５月30日に調査地の地権者より、耕作中に石棺を発見したとの通報を受けた。新しく耕作機械を導入したことにより、掘削深度が深くなり発見されたようである。現地において地権者と協議を行った結果、今後の耕作への影響が大きいことなどから、現位置での保存は難しいとの結論に達し、発掘調査を行い記録保存することとなった。発掘調査は2011（平成23）年６月15日～同７月20日で行った。

石棺の発見時に、蓋石と思われる４枚の石を全て動かし、その後に現位置（P24 PL.12）に戻したとのことであった。４枚の石には、それぞれ農耕用機械による傷が大きく残っていた。蓋石を除去後、清掃を行った（P24 PL.13）。当初５枚と思われてた蓋石の１枚は小口石であった。蓋石は４枚とも幅約60cm、長さ約40cm、厚さ約15cmの阿蘇溶結凝灰岩製であった。

調査区（P17 Fig.16/P24 PL.11/P26 PL.22）は畑地で、現在も一年を通じて様々な野菜等が作られている。調査区の基本的な層序は以下の通りである。第１層は耕作土で、層厚は約30～40cmであった。また、作物を作る際や、保存のために掘られたツボと呼ばれる穴が、いたる所に掘られていた。深いもので１ｍを超すものもあった。耕作土の下は、淡暗黄褐色土層（第２層）で層厚は約30～40cmであった。万遍なく暗橙褐色の焼土の細かい粒が混じっている。押型文土器等の縄文時代早期の遺物が混じる。その下層は黄褐色粘質土層（第４層）のローム層で、掘り下げる中で、不定形で浅い焼土集中部が検出されている。焼土は部分的に硬く焼け締まって検出された。ほぼ同時期の調査となった岩土原遺跡（第２次）・岩土原遺跡（第２次）においても、同様の焼土集中部が検出されている。その一部に掘込みを有すものがあり連結土坑と判断される。第５層は暗褐色土であり、３～５cm大のブロック状を呈する。



1. 耕作土
1'. 撹乱土　暗褐色土・軟らかい
1''. 撹乱土　暗褐色土・4層がﾌﾞﾛｯｸ状に混じる
2. 淡暗黄褐色土　万遍なく焼土粒が混じる
3. 暗黄褐色粘質土　2層と4層ﾌﾞﾛｯｸが混じる
4. 黄褐色粘質土
5. 暗褐色粘質土　上位白斑ローム
6. 淡暗黄褐色土　墓壙内
7. 淡暗黄褐色土　墓壙内・非常に軟らかい・焼土粒混じる
8. 淡暗黄褐色土　墓壙内・やや硬くしまる
9. 淡暗黄褐色土　墓壙内・硬くしまる
10. 焼土　4層に焼土粒が集中して混じる
10'. 焼土　暗橙色焼土

Fig.16　岩土北平遺跡（第３次）調査区及び遺構配置図（1/40）

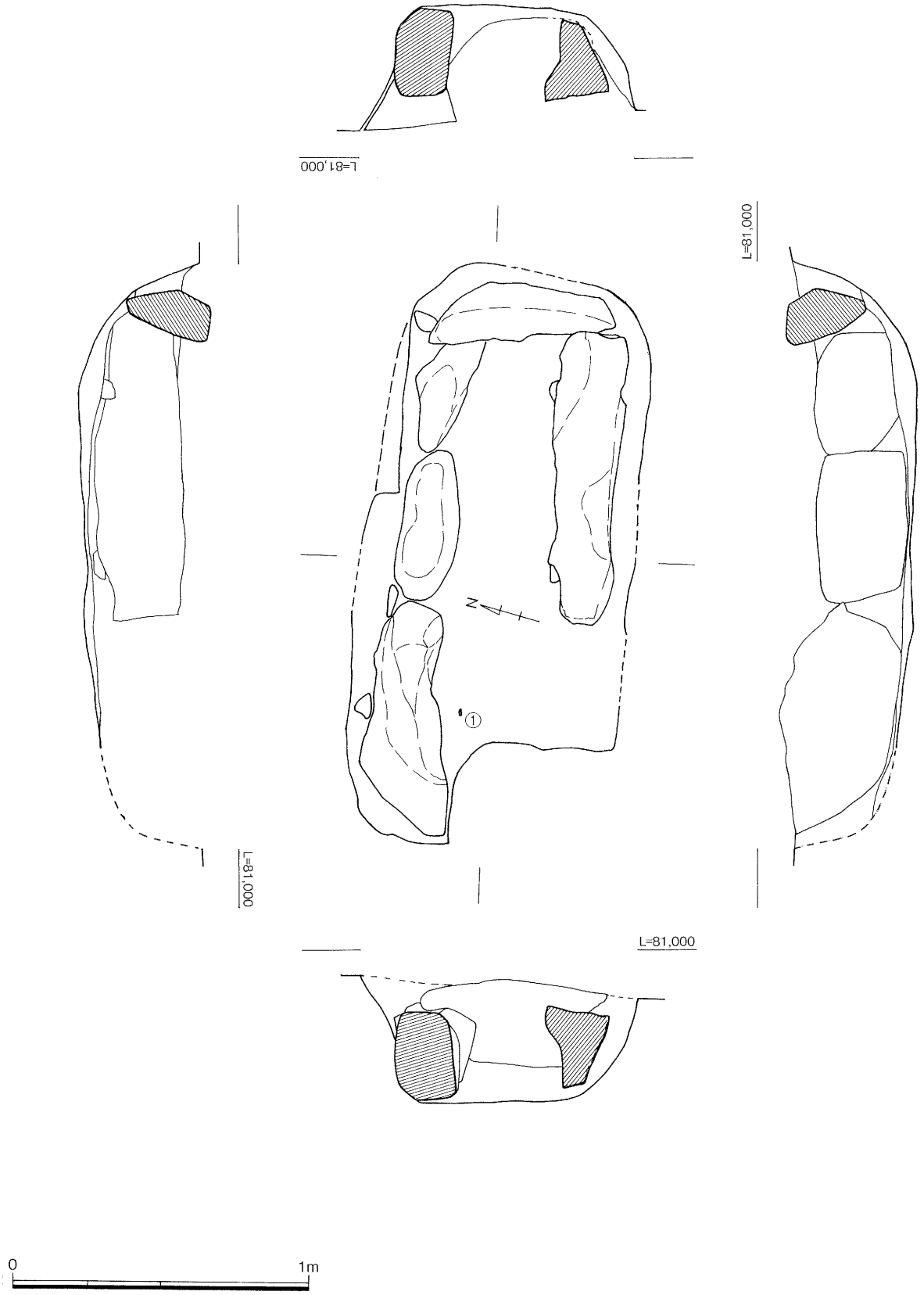


Fig.17　岩土北平遺跡（第３次）出土石棺実測図（1/20）

（3）検出遺構

①石棺1基（P18 Fig.17/P24 PL.12～15/P25 PL.16～21）

耕作中の畑から検出されており、盛土等の確認は出来なかった。これまでに北方町で墳丘を持つ高塚古墳は発見されていない。調査開始以前に、すでに石棺の蓋石は開けられていた。蓋石を除き、石棺の主軸およびそれに直交して土層ベルトを設定した。石棺は、ほぼ東西を向いている。蓋石は凝灰岩の割石が使われているが、大きな加工は伺えない。農耕用機械による傷が残っていた。西側の小口付近に大きな撹乱があり、石棺の一部が破壊を受けていた。小口石と側石の一部は失われている。残存していた蓋石の大きさでは棺身全てを覆うことができず、蓋石の一部も失われていると判断される。

概　要　石棺の石材は全て阿蘇溶結凝灰岩である。西小口は失われている。東小口は逆台形で厚さ約16cm、最大幅約64cm、高さ約28cmの1枚の石である。その上部は棺内部に向かい傾いていた。北長側石は3枚である。東小口に接する石は内に向けて傾いた状況で置かれていた。長さは48cmで、最大幅は18cmである。その石に接して、次の石は置かれている。この石は他の石材と違い割石ではなく、角が取れ丸みを帯びた石が使われている。色調も他の石と違い、やや白っぽい。長さ51cm、最大幅20cmである。西小口側の側石は長さ79cm、最大幅29cmと大きく、また高さも高い、北長側石の他の2枚の石よりも棺身上端の高さは12cm程高くなる。しかし、この石は段を有し、段の高さは先の2つの石の棺身上端部と概ね水平をなす。段は特に加工の痕跡は見られない。どの石も底部の形状が内傾するため、棺身上端では互いに接するが、底部付近では10～20cm程の隙間が生じている。南側石は一部破壊されており、1枚しか残っていなかった。長さが約100cm、最大幅24cmと大きく、相対する北側石の2枚とほぼ同じ長さである。東小口に対して、ほぼ垂直に接する。底石はなかった。床面は、東小口に向かい緩やかに上っている。西小口が残っていない状態での判断であるが、東頭位であると判断できる。

規　模　石棺の規模は残存部で全長188cm、幅は最大で約72cmを測る。石材の高さは、北側石の1枚を除き30cm前後である。東小口石の棺身上部は、北・南側石の棺身上部より約10cm高くなっている。検出時に蓋石が5枚あるように見受けられたように、蓋石の厚さが15cm前後であるため、蓋石を置いた状態での石棺上部の高さは、水平に近い形状を為すものと思われる。前述の北側石の段についても同様で、蓋石を置くと水平に近い状態になると考えられるが、相対する南側石や、西小口石が失われており、その構造については明らかにできなかった。

墓　壙　墓壙は石棺石材より一回り大きく掘り込まれている。第2層を掘り込んでいる。第2層は、第4層で検出される焼土の粒が万遍なく混じる層で、土器片等も混じり、縄文早期の包含層を撹乱している様相を示している。旧石器～縄文早期の遺物が混じることから、縄文早期以降～石棺構築以前までに、何らかの大きな地形の改変が行われている可能性が高いと判断する。墓壙の規模は、推定で長さ約202cm、最大幅92cm、深さは最深部で約46cmであった。北長側石は墓壙壁と接するように置かれ、南長側石は少し離れて設置されている。まず北側石側から構築されたものと推察される。

遺　物　石棺内の埋土は全て水洗を行った。石棺内及び石棺周辺からは、石棺の時期を特定できる遺物は出土していない。唯一、石棺の西側、北長側石付近で鉄鏃の茎部の一部が出土しただけである。（P18 Fig.17①）

調査後の処置　石棺は完掘後、その石材を全て当教育委員会で保管している。

②土坑（P17 Fig.16/P26 Fig.24）

石棺完掘後、石棺の下に大きな掘込みが確認された。土層断面で確認したところ、焼土集中部と連続した土層が確認できた。連結土坑の可能性があるが、石棺及び近現代の撹乱により詳細は不明である。

（4）出土遺物

今回の調査では、旧石器～縄文時代早期の遺物が出土している。石棺内の埋土を水洗した際に、チャート類等の多量のチップが検出されており、遺跡周辺での石器の製作が伺えた。

①石器類（P21 Fig.18/P22 Fig.19/P22　表3/P26 PL.25）

1は黒色系の流紋岩製のスクレイパーである。打面を調整し、刃部を左側縁下部から端部にかけて細かい使用痕が見られる。基部側にも細かい調整を施している。2は使用痕を有する剥片で、礫面を多く残している。石材は1と同様である。左側縁に微細な使用痕が伺える。3・4は敲石である。両端部に著しい敲打痕が認められる。5～9は石鏃である。5はチャート製である。白色のチャートで薄い灰色の縞が入る。成形が悪く、かなり歪んでいる。6もチャート製の石鏃である。5と同様の石材である。抉りは曲線的で深い。7も同様の石材を使用している。非常に丁寧な作りである。8は透明度のあるチャートを使用している。尖頭状石器にも分類できそうであるが、基部に抉りを施そうとした痕跡が見られ、また9のように大型の石鏃もあることから石鏃とした。9は5～7と同様の石材を用いている。10～11は、やや厚めの石材で尖頭状石器に分類した。10は石材は9と同様である。11は黒色が多いチャートである。12は水晶の加工を有する剥片である。

②土器類（P23 Fig.20/表4/P26 PL.26）

13は撚糸文の土器で、外面には横に平行に、口縁部内面に縦にくの字状に施文されている。14・15は外面に山型の押型文、口唇部内面に施文原体を下方向に押圧している。16は内面を横方向に、外面を妙方向に山型の押型文を施文している。17は押型文土器の底部で、斜め方向に山型の押型文が施文されている。指押さえの痕が残っている。18は外面に山型押型文、内面は無文である。19は楕円型押型文で外面は縦長に、内面は横長に施文されている。内面は底部に向かい無文になる。20・21は無文土器の口縁部である。

（5）まとめ

今回の調査では、北方町で後曽木・殿上・矢野原等についで4箇所目の石棺の発見例となった。五ヶ瀬川右岸では、初めての発見例となる。遺物の出土はなく、その時期を確定することは出来なかった。石棺の作りは他遺跡での例より、非常に粗雑であった。今後、発見例の増加に期待したい。

縄文早期の遺物の出土も多く、連結土坑や炉跡を伺わせる焼土集中部が見られた。また、本遺跡の第2層は縄文早期面を撹乱された後に、石棺が掘り込まれており、古い段階での造成等の大きな地形改変の痕跡が伺え、今後の調査では充分な注意が必要であろう。

また、本遺跡の北側には「カジヤシキ」と呼ばれる地点があり、すり鉢状の鉄滓などが採集されており、本遺跡周辺での開発には充分に注意が必要である。

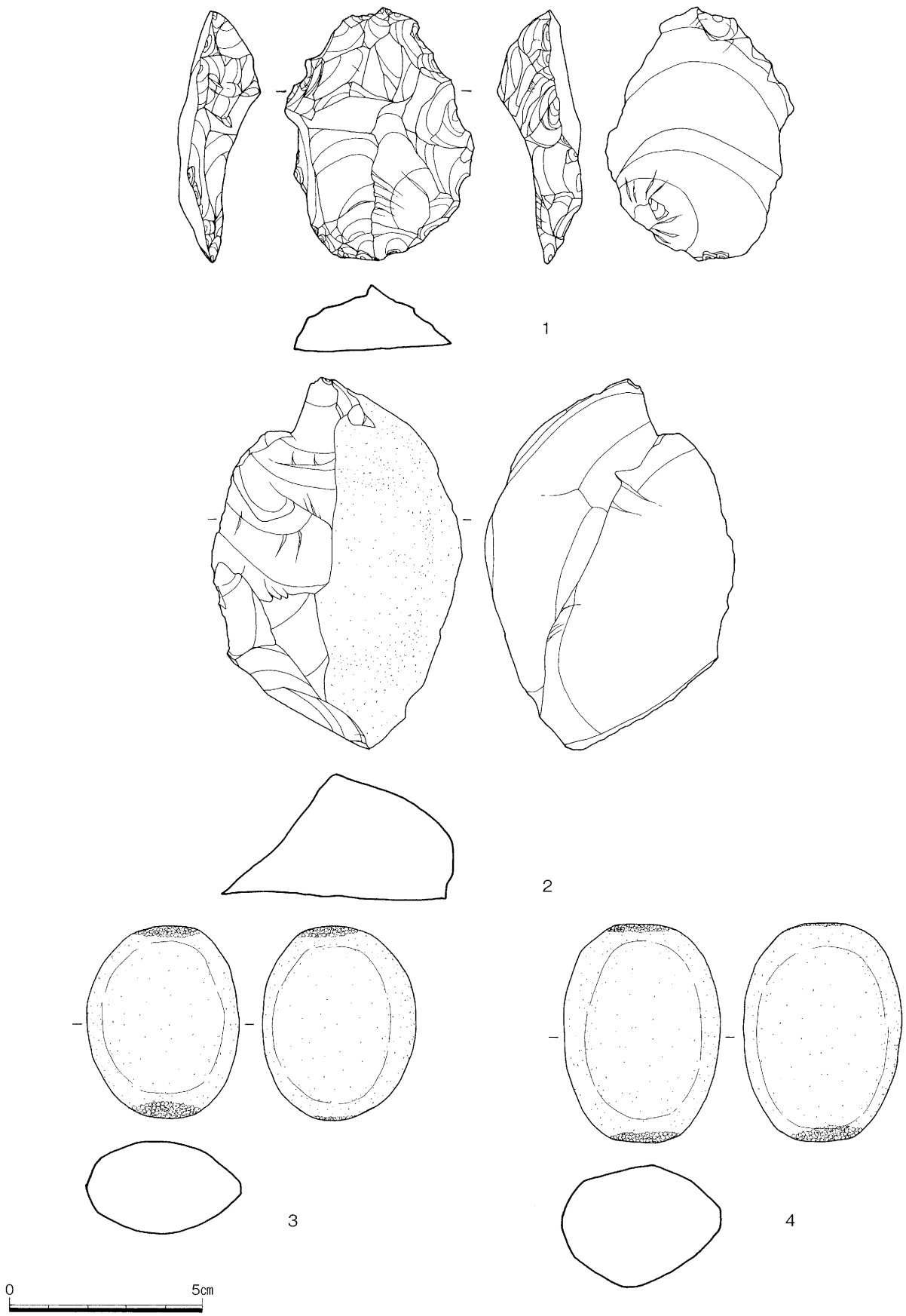


Fig.18　岩土北平遺跡（第３次）出土遺物実測図１（2/3）

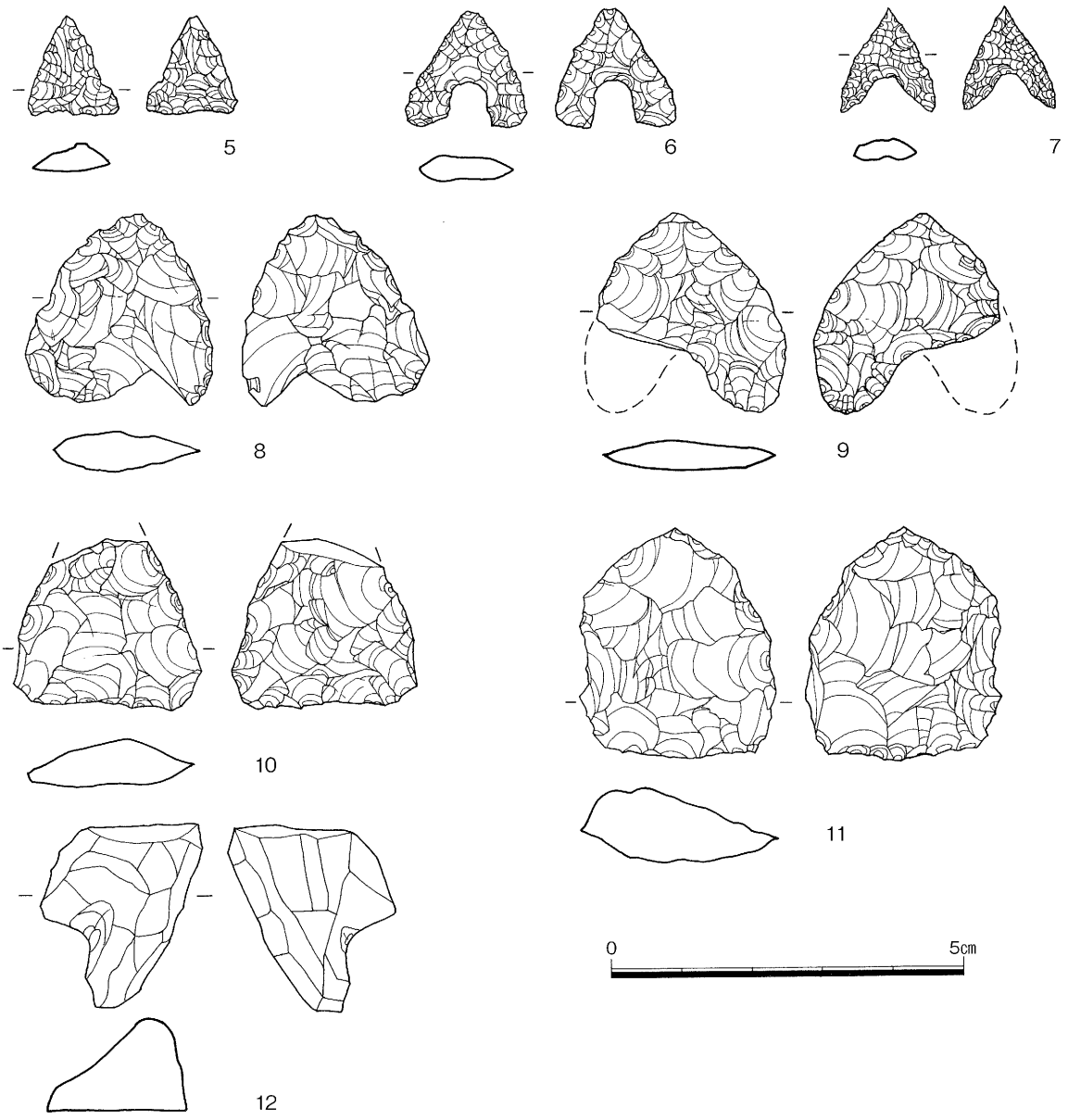


Fig.19　岩土北平遺跡（第３次）出土遺物実測図２（1/1）

番号	種別	器種	石材	法量			
				最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）
1	石器	掻器	流紋岩	6.5	4.8	1.8	52.83
2	石器	使用痕剥片	流紋岩	9.6	6.6	3.1	187.72
3	石器	敲石	砂岩	5.0	3.9	2.9	75.78
4	石器	敲石	砂岩	5.8	4.1	3.2	118.05
5	石器	石鏃	チャート	1.4	1.3	0.4	0.55
6	石器	石鏃	チャート	1.6	1.7	0.4	0.76
7	石器	石鏃	チャート	1.5	1.35	0.3	0.32
8	石器	石鏃	チャート	2.7	2.7	0.7	4.51
9	石器	石鏃	チャート	2.8	2.5	0.45	3.61
10	石器	尖頭状石器	チャート	2.9	2.7	0.7	4.66
11	石器	尖頭状石器	チャート	3.3	2.8	1.0	8.60
12	石器	加工を有する剥片	水晶	2.6	2.1	1.3	5.72

第３表　岩土北平遺跡出土石器観察表

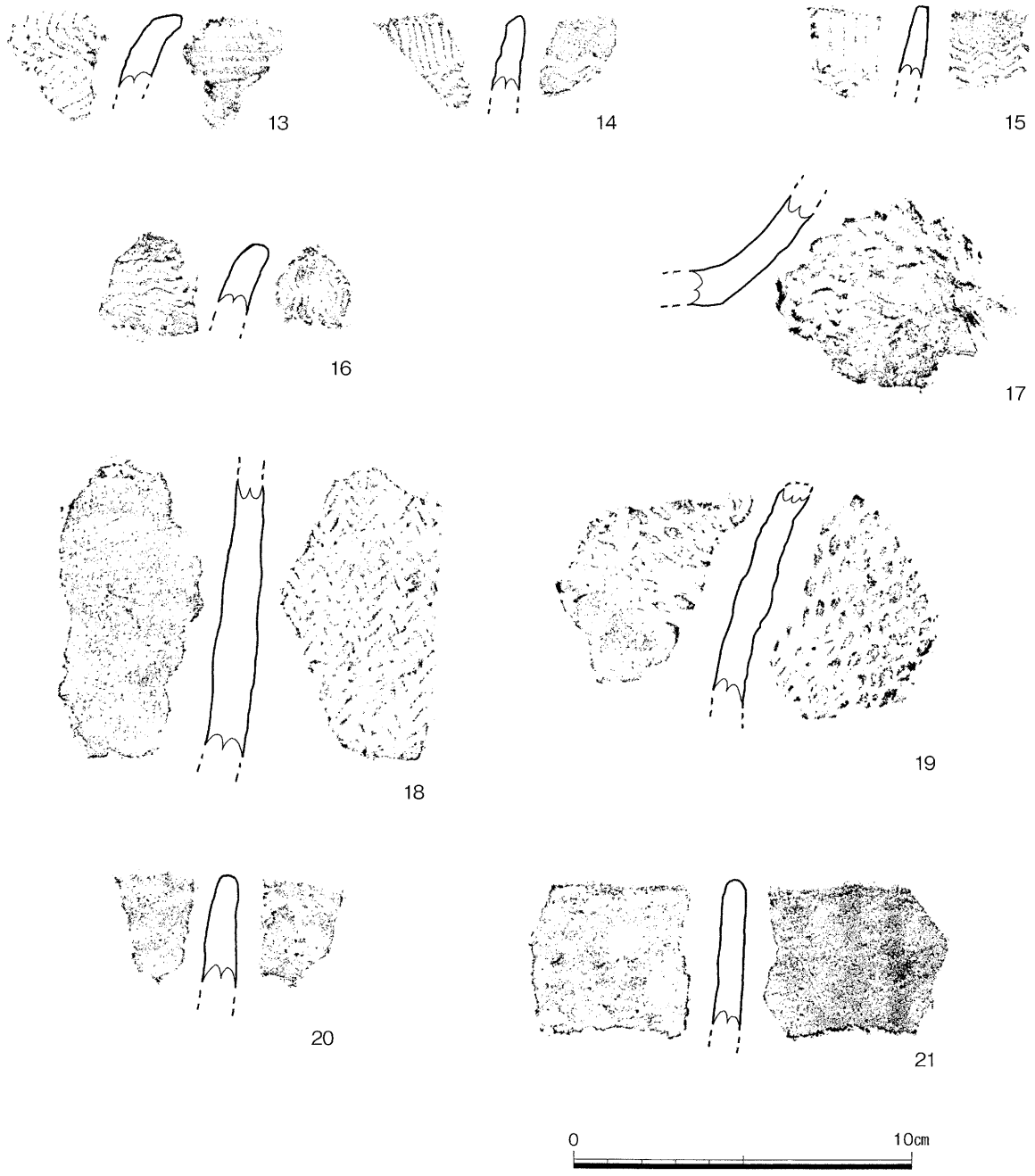
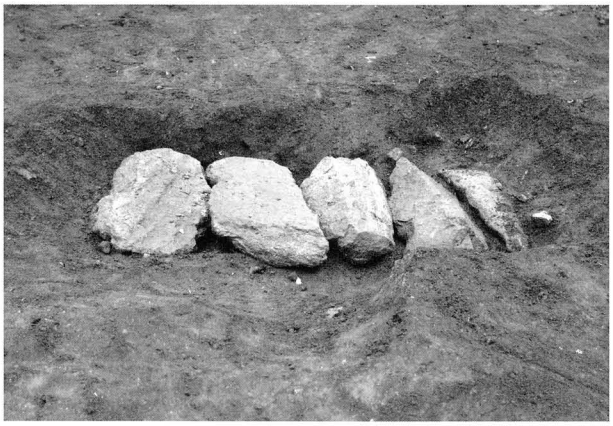


Fig.20　岩土北平遺跡（第３次）出土遺物実測図３（1/2）

番号	種別	器種	形態及び文様	色調		備考
				外面	内面	
13	土器	口縁部	(内)撚紋　(外)山形押型文	赤褐色	赤褐色	砂粒含む
14	土器	口縁部	(内)山形押型文･原体押引き　(外)山形押型文	暗褐色	暗茶褐色	砂粒含む　外面スス付着
15	土器	口縁部	(内)山形押型文･原体押引き　(外)山形押型文	赤褐色	暗赤褐色	砂粒含む
16	土器	口縁部	(内)山形押型文　(外)山形押型文	にぶい黄橙	暗茶褐色	砂粒含む
17	土器	底部	(内)山形押型文　(外)山形押型文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂粒含む　指押さえ痕
18	土器	胴部	(内)山形押型文　(外)ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂粒含む　胴部のみ
19	土器	口縁部	(内)楕円形押型文　(外)楕円形押型文	にぶい黄橙	赤褐色	砂粒含む
20	土器	口縁部	(内)無文　(外)無文	赤褐色	暗赤褐色	砂粒含む
21	土器	口縁部	(内)無文　(外)無文	赤褐色	赤褐色	砂粒含む　スス付着

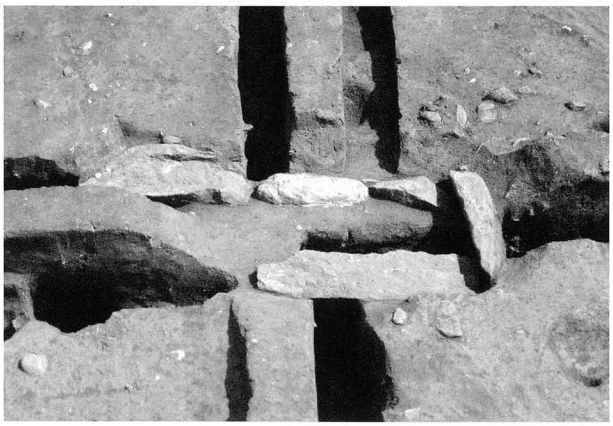
第４表　岩土北平遺跡出土土器観察表

PL.11　岩土北平遺跡（第３次）空中写真（北西から）



PL.12　岩土北平遺跡（第３次）石棺調査前（南から）

PL.13　岩土北平遺跡（第３次）石棺蓋石除去状況（南から）



PL.14　岩土北平遺跡（第３次）石棺棺身検出状況（南から）

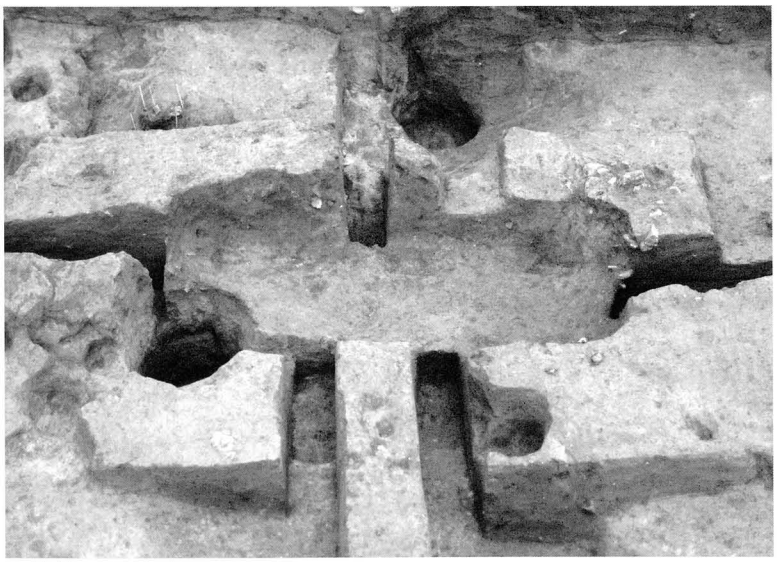
PL.15　岩土北平遺跡（第３次）石棺調査状況（南から）

PL.16　岩土北平遺跡（第３次）石棺完掘状況（南から）

PL.17　岩土北平遺跡（第３次）石棺完掘状況（東から）

PL.18　岩土北平遺跡（第３次）石棺完掘状況（北から）

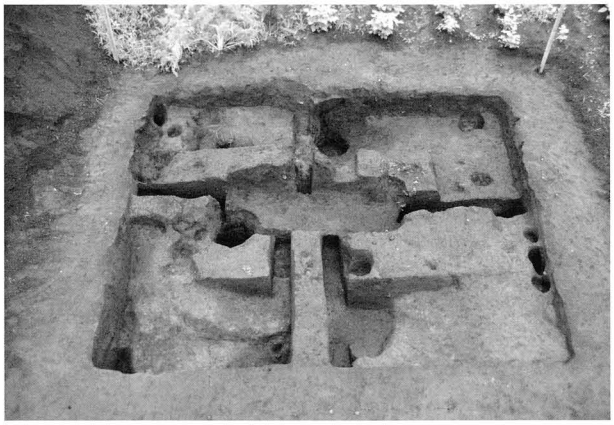
PL.19　岩土北平遺跡（第３次）石棺完掘状況（西から）



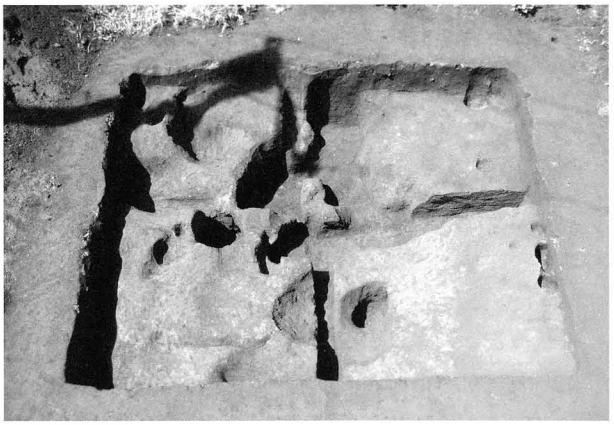
PL.20　岩土北平遺跡（第３次）石棺掘りかた状況（南から）

PL.21　岩土北平遺跡（第３次）石棺掘りかた状況（西から）

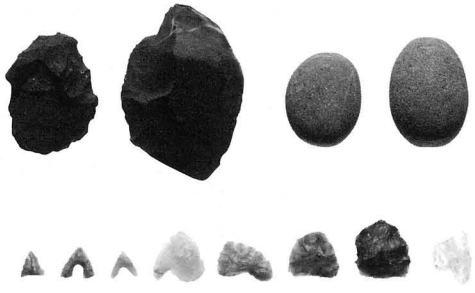
PL.22　岩土北平遺跡（第３次）遺構検出状況



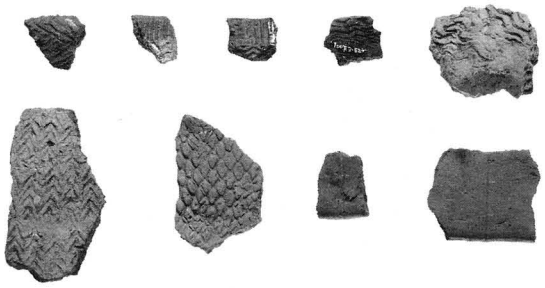
PL.23　岩土北平遺跡（第３次）石棺撤去後（南から）



PL.24　岩土北平遺跡（第３次）完掘状況（南から）



PL.25　岩土北平遺跡（第３次）出土遺物



PL.26　岩土北平遺跡（第３次）出土遺物

5．延岡城内遺跡（第23次）

所 在 地　延岡市天神小路310－2　　調査面積　6.0㎡
調査原因　個人住宅建設　　担 当 者　甲斐
調査期間　20110720～20110722　　処　　置　慎重工事

（1）位置と環境

延岡城は1603年に築城された、宮崎県内有数の近世城郭である。市内を流れる五ヶ瀬川、大瀬川に挟まれた中州に位置し、標高約54mの独立丘陵という天然の要害に築かれている。

今回の調査地は、標高5.1m、延岡城の位置する丘陵の西側裾部にあたる。

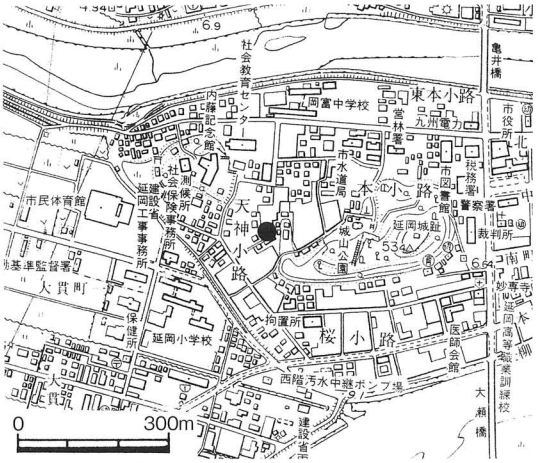


Fig.21　延岡城内遺跡（第23次）位置図（1/15,000）

（2）調査の概要

開発予定地のうち、延岡城の丘陵の裾に近い東側の場所は、宅地造成に伴う削平や撹乱を受けている可能性が高かった。そのため、丘陵裾部から最も遠い西側の箇所に２×３mのトレンチを設定し、掘り下げを開始した。

地表から約80cmの深さで四万十層の風化土層（地山）を確認し、南北方向に走る浅い溝状遺構を１条検出した。遺構内から遺物は出土せず、時期や性格は不明であった。遺構の直上までは造成土であり、微量の近代以降の磁器が含まれていた。

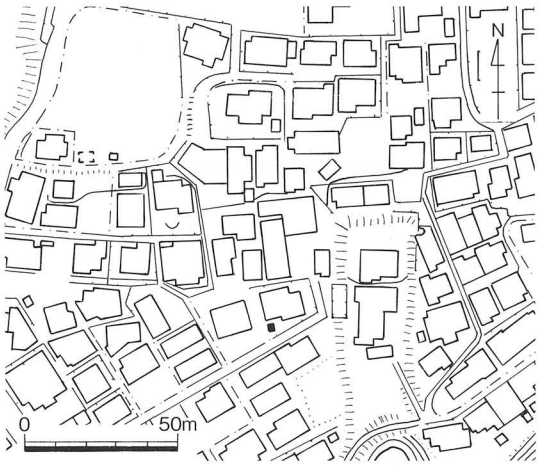


Fig.22　延岡城内遺跡（第23次）調査区配置図（1/2,500）

（3）検出遺構

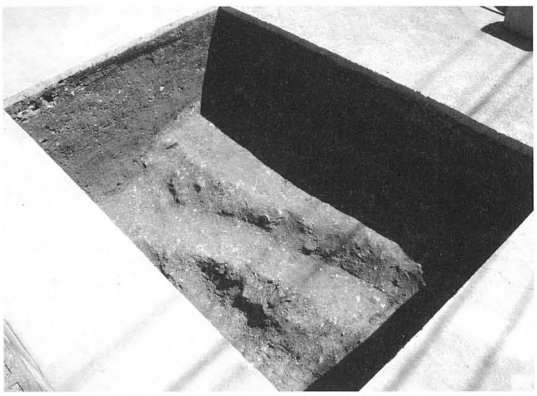
溝状遺構１条（時期不明）

（4）出土遺物

近代以降の磁器（造成土内出土）

（5）まとめ

溝状遺構より東側の旧地形は丘陵裾であった可能性が高い。今回は溝状遺構の時期や性格を特定できなかったが、延岡城に関わる遺構である可能性も否定はできない。今後周辺で開発が行われる際にはその点にも留意して調査を行う必要がある。



PL.27　延岡城内遺跡（第23次）近景（南から）

6．北浦町淵ノ元地点

所 在 地　北浦町古江1943－1 外　　調査面積　60.0㎡
調査原因　その他の建物　　担 当 者　尾方
調査期間　20110823～20110825　　処　　置　工事実施

（1）位置と環境

北浦町は延岡市の北東部に広がる地域である。宮崎県においても最北東部にあたり、大分県佐伯市と境を接する。

調査地のある古江地区は古江川の河口部に形成された小規模な沖積平野である。平成19(2007)年度～平成20年度にかけて東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が、宮崎県埋蔵文化財センターによって実施されている。中野内遺跡等からは弥生～古墳時代にかけての集落跡が検出されている。今回の調査地点は、延岡市役所北浦町総合支所のほぼ南に隣接する箇所で、古江港から約600mの地点である。

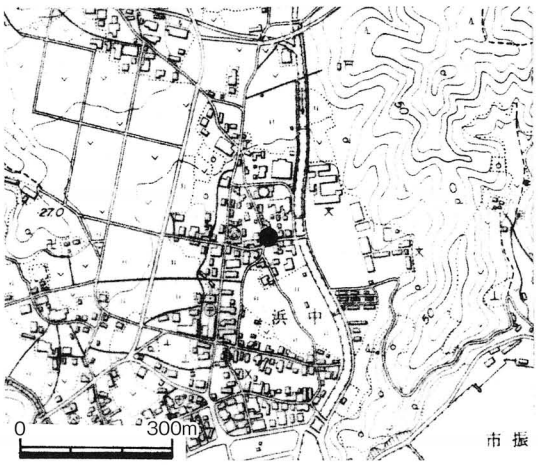


Fig.23　北浦町淵ノ元地点位置図（1/15,000）

Fig.24　北浦町淵ノ元地点調査区配置図（1/2,500）

（2）調査の概要

延岡市立図書館北浦分館の建設に伴い、試掘調査を実施した。調査は建設予定地の南端、北端付近にそれぞれ各１箇所計２箇所のトレンチを設定し調査を行った。両トレンチ共に地表から約１mは客土層であり、約２mで湧水があった。湧水は潮位の影響を受け、水位が変化した。客土層の下層は砂礫などの堆積層であった。

（3）検出遺構

なし。

（4）出土遺物

なし。

（5）まとめ

現在の海岸線からの距離も近く、また比高差がなく遺跡の存在は極めて低いと判断される。当地区での遺跡分布を考える一つの材料となった。

PL.28　北浦町淵ノ元地点近景（南西から）

7．延岡市古墳第13号墳

所 在 地　延岡市柚の木田町1320外　　調査面積　7.1㎡
調査原因　範囲確認　　担 当 者　尾方
調査期間　20110826～20110912　　処　　置　保存

（1）位置と環境

宮崎県指定史跡である延岡市古墳は、市内に点在する19基からなる古墳の総称である。1939（昭和14）年に34基の古墳が指定されたが、開発等により15基が消滅している。

延岡市古墳第13号墳は、市内を流れる祝子川と北川に挟まれた下流域の沖積平野に所在する。遺跡周辺は水田地帯である。遺跡周辺の柚の木田町、牧町、粟野名町、大門町には延岡市古墳12～15号墳が点在している。市内に分布する古墳は、丘陵上に築造されるのがほとんどであるが、当地区の古墳は平地にあり、神社として祀られているものが多い。円墳として指定されているが、第16号墳以外は未調査であり、また現状では墳丘を確認できないため、その詳細は明らかでないものが多い。

第16号墳の調査は、平成12（2000）年に隣接地を含めて範囲確認調査を行った。古墳の盛土等は認められなかった。古墳時代の遺物等も出土しているが、古代以降の遺物が多く出土している。調査範囲が限定されたため、古墳の所在の有無については結論を出すに至らなかった。

延岡市古墳第13号墳は柚の木田町に所在し、直径約16mの円墳と考えられている。墳丘上には廣田荒神社が建ち、地区の方々により大事に祀られている。本来は水田に囲まれていたようであるが、宅地化に伴い南東側を除き、墳丘を取り巻くように盛土造成されている。盛土は墳丘と距離をとるようになされており、墳丘との境に溝状の段差ができ、一見、周溝を思わせる状態であった。今回、墳丘の北側の土砂が風雨により流出していることが判明した。それに伴い廣田荒神社の社殿基礎の一部が、露出する等の影響が出ていることも明らかになった。宮崎

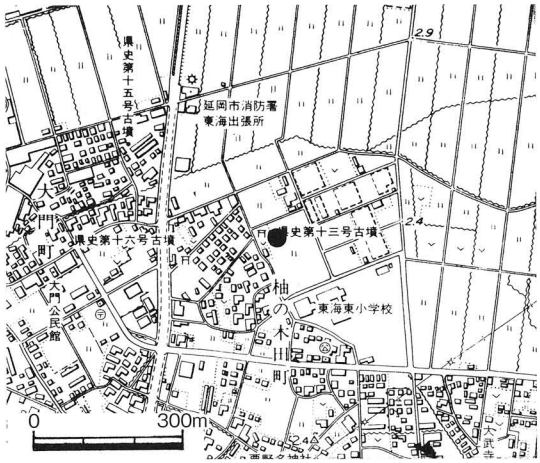


Fig.25　延岡市古墳第13号墳位置図（1/15,000）

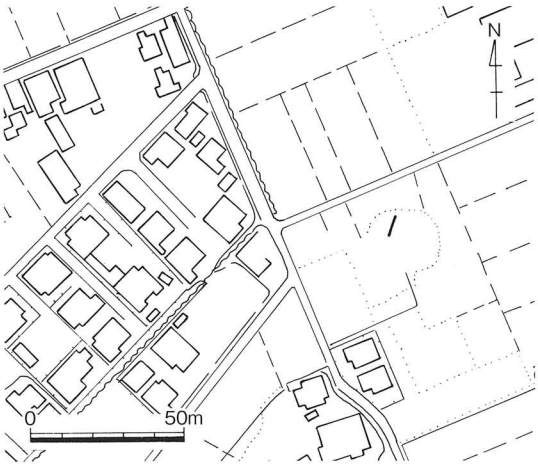
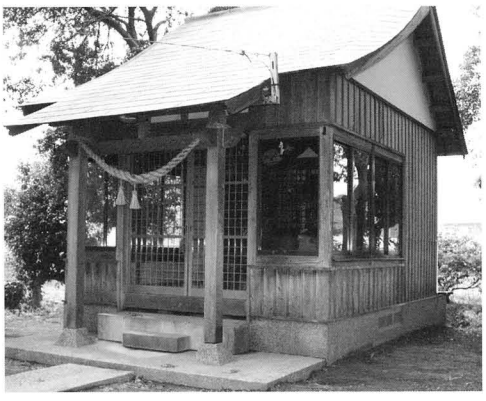


Fig.26　延岡市古墳第13号墳調査区配置図（1/2,500）


PL.29　廣田荒神社

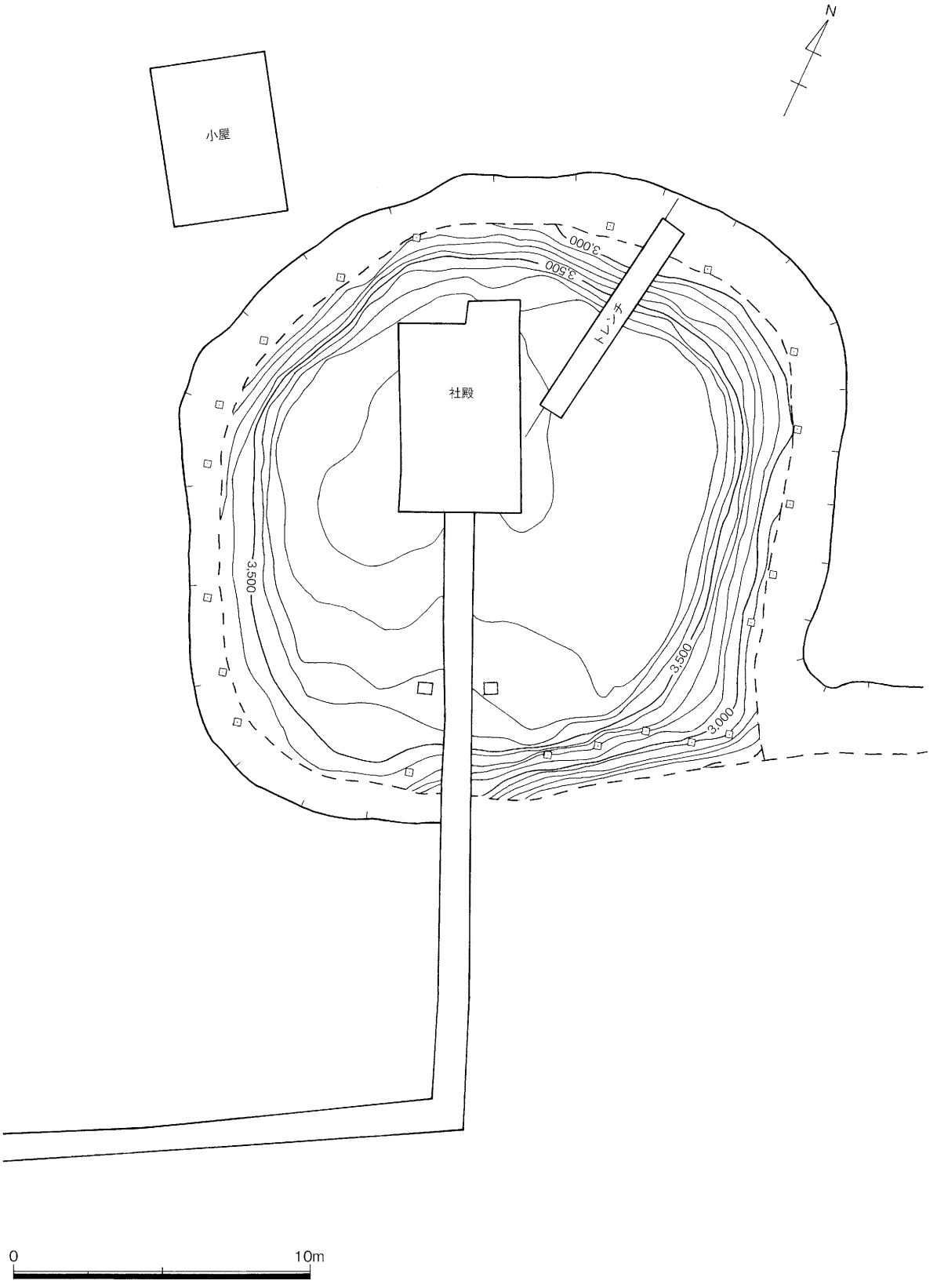


Fig.27　延岡市古墳第13号墳墳丘測量図（1/200）

県文化財課等と協議の結果、これ以上の土砂流出を防ぐために、古墳に影響の無い位置にブロック塀を築き盛土を行うこととなった。工事着手前に確認調査を行い、古墳の規模・範囲の把握を行うこととなった。

（2）調査の概要

現状での墳丘測量を行った（P30 Fig.27）。トレンチは立木への影響が少なく、またブロック塀の施工予定範囲を念頭に置き設定した。また隣地地権者の同意を得て、確認のため盛土の一部についても調査を行った。

土層の堆積状況は以下の通りであった（P31 Fig.28）。第１層・第１'層は現代の盛土及び撹乱土である。第１層は砕石・砂利層、第１'層はレンガ片・コンクリート片・瓦辺等の層であった。隣接地の盛土の状況も確認したが、第１'層と同様の盛土が確認された。周溝状に見える地形は、廣田荒神社の盛土と隣接地の盛土によって形作られていることが判った。第２層は淡黄褐色土で陶磁器等の出土もあったが、現代の遺物も混じる。第３層淡黄褐色土、第４層淡黄褐色粘質土には、第６層の淡青灰色粘質土がブロック状に混じり、特に第４層は硬くしまる。第６層を盛土をして、塚状に整地したものと判断される。第３層・第４層からは陶磁器が出土している。18世紀後半から19世紀にかけての陶磁器が殆どで、その時期に大きく造成しているものと考えられる。第７層は淡青灰色粘質土で、暗橙色の鉄分斑が全体的に見られた。硬くしまる層で、水田耕作における基盤層と判断される。第５層は淡茶褐色土で砂混じりの層であった。

今回の調査で、第５層はごく一部しか調査できず、遺物等の出土はない。現時点で判断すると、第５層の上に第６層を含め第４層、第３層を盛土をし、その後、第２層を盛土し現在の境内地を造成している。古墳時代の遺物は検出されず、第５層にその可能性を残す結果となった。

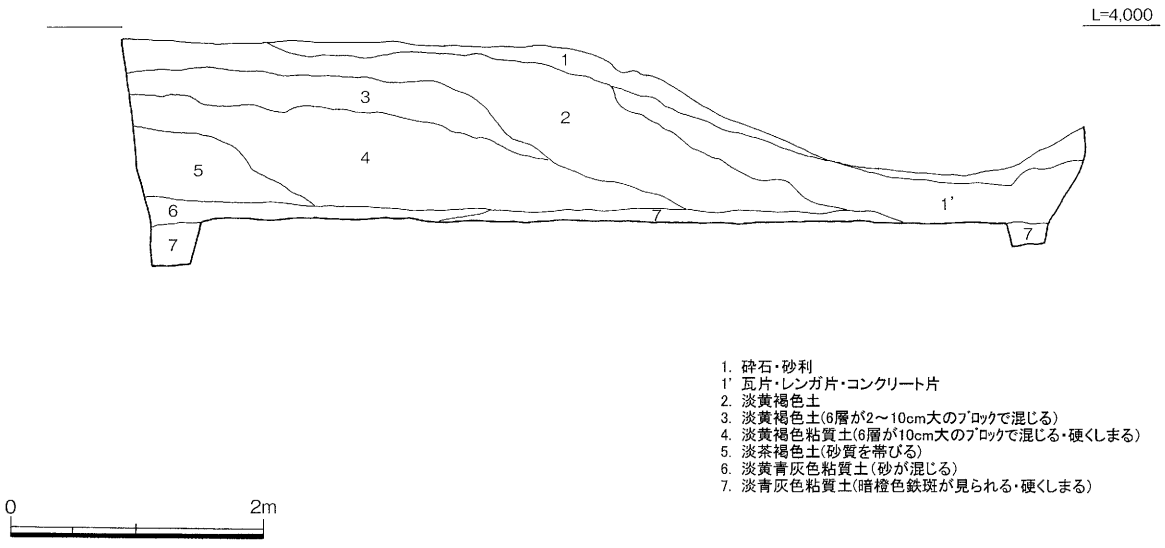


Fig.28　延岡市古墳第13号墳土層断面図（1/60）

（3）検出遺構

なし

（4）出土遺物

第２層～４層から陶磁器等が出土している。

１は土師器の小皿である。口径約６cm、高さ約1.3cm非常に小さい皿である。ロクロ成形後、糸切りにより切り離している。表土一括資料である。２は第２層出土ので肥前系の青磁染付丸碗である。見込みに二重圏線を有し、銘が有る。３も第２層出土の遺物である。染付の端反碗で見込みに銘を有す。見込みに重ね焼き際の釉着が見られる。釉薬の発色は鈍く全体的に灰色に鈍る。コバルトを使用している。４も第２層出土である。肥前系の染付蓋である。返りの部は釉剥ぎされている。５は第３層出土である。肥前系の青磁染付丸碗である。見込みに二重圏線を有し、見込み中央は釉剥ぎされている。６は第３層出土で、龍泉窯系青磁の蓮弁文碗である。14世紀後半から15世紀前半の所産である。７は第４層出土である。肥前系の染付皿で外面に唐草文、内面は墨はじきによる染付が行われている。８は第４層出土である。肥前系の染付皿で、口径は復元径で約12.6cm･底径（復元径）約4.6cmであった。外面はヘラによる成形痕が残り、大きな貫入も見られる。高台畳付は無釉である。内面は二重斜格子文を施し、見込みに二重圏線を巡らす。見込み蛇ノ目釉剥ぎで、砂目痕が残っている。

番号	種別	器種	出土地点	法量			形態及び文様
				口径・長	底径・幅	器高・厚	
1	土師器	皿	一括	6	3	1.3	横ナデ・糸切り
2	青磁	青磁染付	2層	－	4.0	－	（内面）見込二重圏線
3	磁器	染付碗	2層	10.8	5.5	4.0	（外面）草花文（内面）蛇の目釉ハギ
4	磁器	染付蓋	2層	9.8	－	－	
5	磁器	青磁染付	3層	11.2	3.6	5.4	（内面）見込二重圏線
6	磁器	青磁碗	3層	－	5.2	－	（外面）蓮弁
7	磁器	染付皿	4層	11.8	－	－	（内面）墨はじき
8	磁器	青磁染付皿	4層	12.6	4.6	3.5	

第５表　延岡市古墳第13号墳出土遺物観察表

（5）まとめ

今回の確認調査は、この地域に分布する平地部での指定古墳の調査として、延岡市古墳第16号墳についで２例目である。調査の結果、近世期に盛土工が行われた遺跡として認められるが、古墳としての痕跡は少なかった。しかし、本調査の第５層については、ほぼ未調査となるため古墳の墳丘としての可能性も否定できない。また部分的な確認調査となっているため、その全容については不明であり、ただちに古墳の存在を否定するものではない。

延岡市古墳第16号墳の調査においては、古墳時代の遺物の出土はあったが墳丘等は確認できていない。近接する友内山や無鹿町では、墳丘を持たない箱式石棺等の出土例もある。本古墳周辺の地域には、未調査の古墳等も点在しており、本地域の墓制を理解するうえで、その立地や構造について今後の調査例の増加に期待したい。

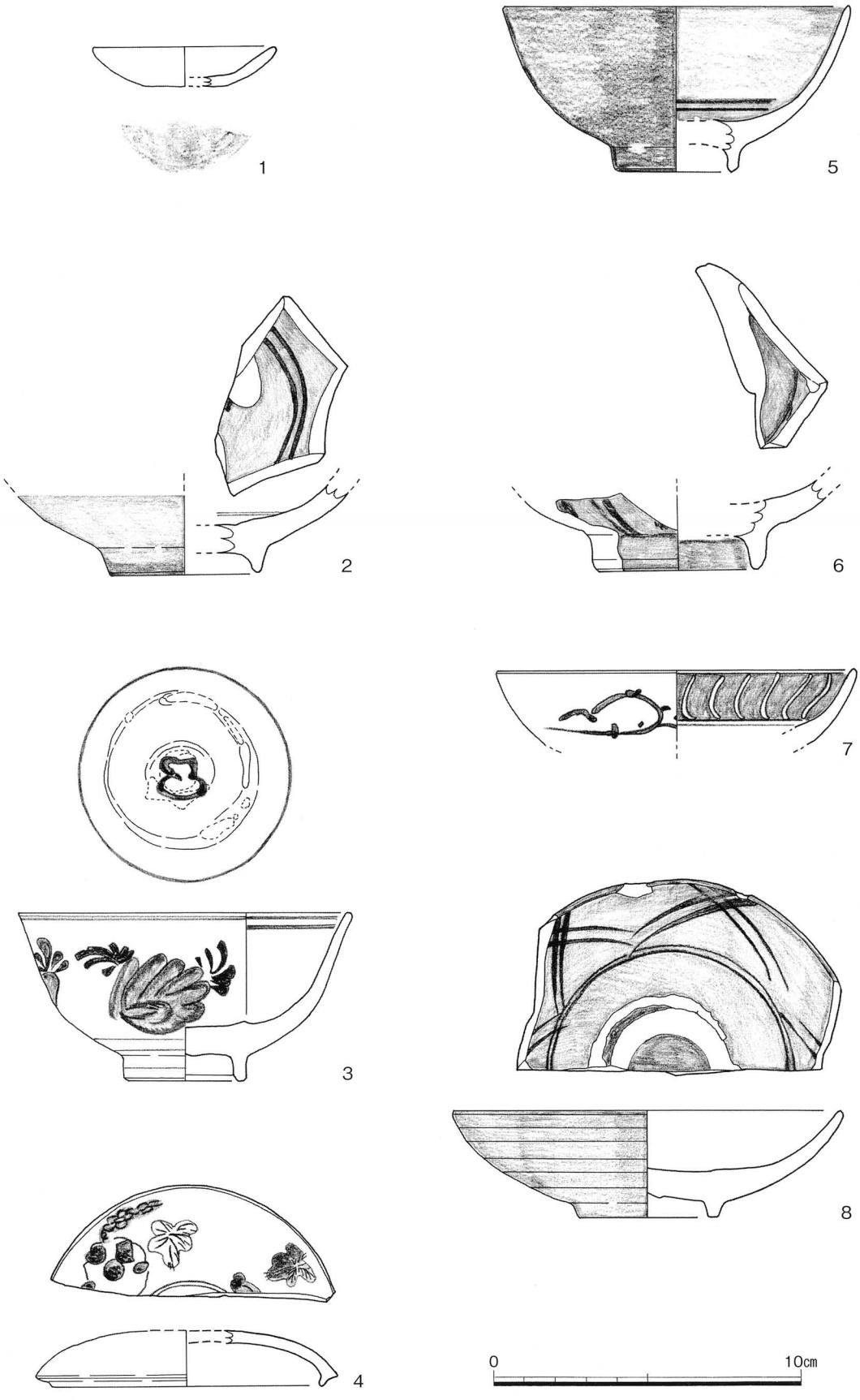


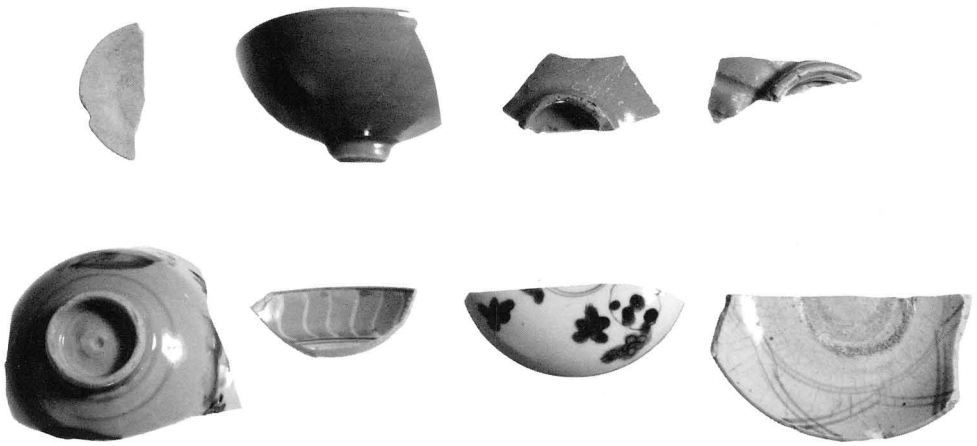
Fig.29　延岡市古墳第13号墳出土遺物実測図（1/2）

PL.30　延岡市古墳第13号墳近景（南東から）

PL.31　延岡市古墳第13号墳近景（南から）

PL.32　延岡市古墳第13号墳調査状況

PL.33　延岡市古墳第13号墳土層断面



PL.34　延岡市古墳第13号墳出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しないいせき
書名	市内遺跡
副書名	平成23年度市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	延岡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第47集
著者名	尾方農一、甲斐康大
編集機関	延岡市教育委員会
所在地	宮崎県延岡市東本小路２－１
発行年月日	2012年３月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
延岡城跡（第26次）	延岡市本小路94－３	452033	3028	32° 34′ 56″	131° 39′ 48″	2012／0301～2012／0310	131.3㎡	その他の開発（範囲確認）
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
城跡	近世		箱式石棺		陶磁器			

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
延岡城内遺跡（第22次）	桜小路339－５	452033	3018	32° 34′ 42″	131° 39′ 36″	2011／0523～2011／0527	30.5㎡	その他の建物
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
城跡	中世・近世		無		陶磁器			

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
古川町鴨田地点	古川町82－１外	452033		32° 35′ 11″	131° 38′ 51″	2011／0601～2011／0606	33.4㎡	その他の建物
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
無	無		無		無			

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
岩土北平遺跡（第3次）	北方町笠下寅729	452033	62	32°34′15″	131°38′57″	2011／0615～2011／0720	16.2㎡	農業関連
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
散布地	旧石器～近世		石棺		石器・土器			
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
延岡城内遺跡（第23次）	天神小路310－2	452033	3018	32°34′50″	131°39′35″	2011／0720～2011／0722	6.0㎡	個人住宅建設
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
無	無		無		無			
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
北浦町淵ノ下地点	北浦町古江1943－1・2／1944－2・3	452033		32°42′31″	131°49′17″	2011／0823～2011／0825	60.0㎡	市立図書館北浦分館建設
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
無	無		無		無			
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
延岡市古墳第13号墳	柚の木田町1320他	452033	2510	32°36′13″	131°41′05″	2011／0826～2011／0912	7.1㎡	防災工事
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
円墳	古墳		無		陶磁器			

市 内 遺 跡

平成23年度市内遺跡発掘調査事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

延岡市文化財調査報告書　第47集
2012年3月31日

発行：延岡市教育委員会
宮崎県延岡市東本小路2番地1

印刷：有限会社 河野印刷
宮崎県延岡市川原崎町453